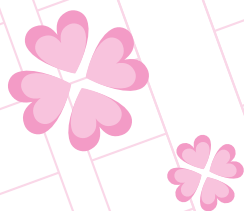


平成30年度

第36回 福祉体験

作文コンクール

優秀作品集



©aichikenshakyo

社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会

はじめに

本会では、昭和五十八年から「福祉体験作文コンクール」を実施しています。本年度は、小・中・高等学校あわせて三百四十二校、六百八十九名の児童・生徒の皆様からご応募をいただきました。ご応募いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

今回も、日常生活の中での様々な経験や家族などとの身近な体験、ボランティアを通して気付いた地域の福祉課題等が、素直な気持ちで作文に表されておりました。

近年、様々な場面において児童・生徒などの若い世代が多様なボランティア体験や福祉活動に取り組む機会が増え、福祉やボランティアへの理解・関心が広まってきております。本会といたしましても、今後、地域福祉活動への支援や福祉教育活動への充実に向けて、より一層取り組んで参りたいと考えております。

このたび、選考委員会において厳正なる審査をし、二十八編の入選作品が決定されました。ここに、本年度の優秀作品集を作成しましたので、今後の福祉教育活動の推進にお役立ていただきたいと思います。

最後に、審査にご協力くださいました各委員の方々、作品の応募にご協力くださいました各小中高등학교、各市町村社会福祉協議会、さらにはボランティア関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成三十一年二月

社会福祉法人 愛知県社会福祉協議会

はじめに	1
目次	2

小学校低学年の部

でこぼこのひみつ	一宮市立中島小学校	一年	水野陽遥	4
そよかぜでわらいヨガ	江南市立古知野南小学校	一年	高井琴	5
もしもぼくだったら	一宮市立西成小学校	二年	小澤奏仁	5
こんどは、ぼくが	大口町立大口北小学校	二年	渡邊絢太	6
しょうがいしゃとわたし	一宮市立丹陽西小学校	三年	小林れい	7
大すきなわたしのひいおじいちゃん	一宮市立今伊勢小学校	三年	深見奏音	8
秋田せん手とぼく	刈谷市立東刈谷小学校	三年	高槻迅	9
ひいおばあちゃんとデイサービス	北名古屋市立師勝東小学校	三年	氣賀澤湊	10

小学校高学年の部

子どもたちのお世話をして感じたこと	豊橋市立汐田小学校	四年	安原成海	11
「幸せ」の運び方	豊橋市立幸小学校	五年	中島咲月	12
ぼくとおばあちゃんとの時間	豊川市立桜町小学校	五年	小野原絢心	14
ひいおばあちゃんとくらして	知立市立知立南小学校	五年	清水音花	15
白いつえのおじいさん	田原市立中山小学校	五年	荒木咲良	16
ヘアドネーションを体験して思うこと	みよし市立中部小学校	五年	中村愛依	18
見える障害と見えない障害	一宮市立萩原小学校	六年	岩田麻宏	19



目にみえる障害、みえない障害……………	一宮市立葉栗小学校	六年	鈴木心夢……………	20
はじめの一步……………	幸田町立深溝小学校	六年	天野友紀葉……………	22

中学生の部

心情の変化から学んだこと……………	愛西市立八開中学校	二年	吉川菜月……………	23
私のひいおばあちゃん……………	飛島村立飛島中学校	二年	種村莉里……………	25
「ボランティア」とは……………	岡崎市立竜南中学校	三年	荻野紗也……………	26
迷子の大人……………	春日井市立味美中学校	三年	滝澤美咲……………	28
ヘアドネーションを経験して……………	津島市立暁中学校	三年	重村ゆうゆ……………	29
「当たり前ってなに？」……………	豊田市立前林中学校	三年	久保田理想乃……………	31
ねえねえ、あの人を見て……………	安城市立東山中学校	三年	山田理奈……………	32
その言葉……………	小牧市立味岡中学校	三年	奥百美……………	34
ボランティアに参加して……………	武豊町立武豊中学校	三年	石井さら……………	35

高校生の部

私を変えてくれた部活……………	中部大学春日丘高等学校	二年	大槻あかり……………	37
小さな行動その一つで……………	愛知県立新城高等学校	二年	杉浦未侑……………	38
審査経過……………				40
作文コンクール要項……………				41

でこぼいのひみつ

一宮市立中島小学校一年

水野

陽遥

あるにちようび。わたしはおかあさんとでかけた。ほーるにたくさん
のひとがあつまっていた。

「ボランテアフェスティバル」とかいてあった。おかあさんはわたし
のをひいて、すたすたとくさんのひとのなかへはいっていった。

そこで、わたしは、きになるものをみつけた。かみにあなをあけてい
るひとがいた。わたしは、かみにあなをあけてあそんでいるのかとおも
ってみていた。

「てんじをおしえてくれるよ。やってみる？」

とおかあさんにきかれた。

「やってみよう!!」

わたしのはじめてのふくしたいけんだった。とてもやさしいかかりのひ
とに、しんせつにおしえてもらえた。てんじは、めのふじゆうなひとが
でこぼこをさわってよむもじだとせつめいをきいてから、どうぐにかみ
をはさんで「みずのひなた」とぼうであなをあけるたいけんをした。や
さしくおしていたら、あながあかなくて、

「つよくおしてね。」

とおしえてもらいながらぼちぼちあなをあけ、六もじなのにたくさん
あなをあけた。そして、しおりがかんせいした。めをとじてさわってみ

た。でこぼこしているだけで、これがもじとはわからなかった。

「くんれんをしないとわからないね。」

とおしえてもらった。

かえりのえれべーたーでさつそくてんじをみつけた。すうじの一、二、
三、あく、しまるたくさんのでこぼこがあった。さわってみたけどやっ
ぱりわからなかった。

わたしは、またてんじをやってみたいとおもった。てんじは、めのふ
じゆうなひとにとってたいせつなものだとわかった。

しんにゆうせいかんげいかいで、おにいさんおねえさんが、てをうご
かしながうたつてくれた。てのだんすとおもっていたらしゅわという、
みみがふじゆうなひとにつたわるたいせつなものだとせんせいがおしえ
てくれた。

てんじもしゅわもなかなかであわないけど、きかいがあったらおぼえ
て、ひつようなひとのやくにたてたらいいなとおもった。



そよかぜでわらいヨガ

江南市立古知野南小学校 一年

高井

琴

わたしは、デイスービスのそよかぜというところへ、おかあさんと、いもうとと、わらいヨガのなかまといっしょにきました。おじいさんとおばあさんと、いっしょにわらいヨガをしました。

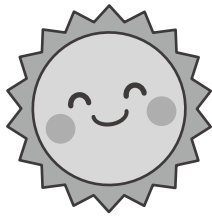
わらいヨガとは、だれでもできるわらいのけんこうほうです。りゆうなくわらう、わらいのたいそうと、ヨガのこきゅうをします。たいそうとしてのわらいでも、おかしいとおもうわらいでも、あたまのなかでは、おなじなのです。だからうそのわらいでも、わらうとげんきになるのです。

めとめをあわせて、あくしゅをすると、おじいさんおばあさんは、やさしくわらってくれて、「かわいいね」と、こえをかけてくれました。うれしかったです。

おどりながらうたったり、わらったりするときは、たのしみながらおきなことでもできました。

わらいヨガをすることが、わたしはたのしくてだいすきです。

おじいさん、おばあさんにも、わらってげんきでいてほしいです。



もしもぼくだったら

一宮市立西成小学校 二年

小澤

奏仁

ぼくは、元気です。でも、まわりには、びよう気やけをしている人が、たくさんいます。お年よりも、たくさんいます。

夏休み、ぼくが電車にのった時に、車いすにのった人が、同じ電車にのってきました。けれども、一人でのることができず、えきいんさんに、ホームと電車との間にいたを思い出してもらい、車いすをおしてもらっていました。ぼくは、たいへんだなあと思いました。

ぼくは、ぼくにはできるけれど、車いすにのっている人ができないことを考えてみました。みんなといっしょに歩いたり走ったり、うんどうしたりあそんだりすることがあります。ころんでも、一人でおき上がれます。できることは、ほかにもたくさんあります。はなたいに、車いすにのっている人ができて、ぼくにはできないことを考えてみました。でも、思いつきません。ぼくは、車いすで生活している人が、かわいそうだと思います。

二〇二〇年、東京でオリンピックとパラリンピックがあります。ぼくはパラリンピックとオリンピックのちがいを知りませんでした。しらべてみると、パラリンピックは体にしょうがいのある人がきょうぎをしてメダルをめざしているものとわかりました。パラリンピックとオリンピックは、マークもちがうし、メダルもちがいます。パラリンピックのメダルは、目が見えない人でも色がわかるように、音が鳴るそうです。ぼくは、パラリンピックにきょうみをもちました。

交通じこで右足をなくしたIさんという男の人が、ぎ足をつけてパラリンピックをめざしていることを知りました。Iさんは、じこでとつぜん右足をなくし、いたくてないてばかりいたそうです。でも、まわりの人がIさんを見てかなしんでいることに気づき、自分が元氣になってみんなをえがおにしたいと、ぎ足をつけ、パラリンピックをめざして走れんしゅうをはじめました。ぼくも、かた足で歩いたりかいだんを上ったりしてみました。体がすごくつかれて、足がいたくて、うごくのがいやになりました。

Iさんのことを知り、ぼくは、車いすにのっている人やしょうがいのある人ができて、ぼくにはできないことに気がつきました。しょうがいのある人たちは、ぼくよりいろいろなことにチャレンジし、いたみをがまんして、まわりの人をえがおにしようとがんばっています。強くてえらいなと思います。

これから、ぼくは、しょうがいがある人もない人も、一生けんめいがんばっている人をおうえんしようと思います。車いすにのっている人がこまっていたら、ぼくは車いすをおしてあげようと思います。みんなが思いやりをもって生活すれば、みんながえがおですごせます。ぼくは元氣なので考えたことがありませんでしたが、これからは、「もしも、ぼくだったら」と考えて生活したいと思います。



こんどは、ぼくが

大口町立大口北小学校二年

渡邊

絢太

ぼくは、春休みに公園でころんで足首をこっせつしました。なおすためにギプスをはめて、まつばづえの生活になりました。まつばづえの生活は、ふべんなことがたくさんありました。

まず、かいだんの上り下りにとでもくろうしました。小さなだんさでも、まつばづえをつかっていると、ころびそうでこわかったです。それに、まつばづえをつかっていると、にもつがもてません。ランドセルのおもさでバランスをくずし、ころびそうになることもあります。

新学がはじまって、はじめてのきゅう食の時間、ぼくはこまってしまいました。トレイをもつてはこべないからです。どうしよう…と思いまわりを見ました。クラスがえをした新しいクラスには、知らない友だちも多く、たのみにくいかんじでした。でも、お母さんが言っていた「こまったときはゆう気を出して『手つだつて』っておねがいするんだよ。」

ということばを思い出して、ドキドキしながら

「ぼくのはこんでくれる?」

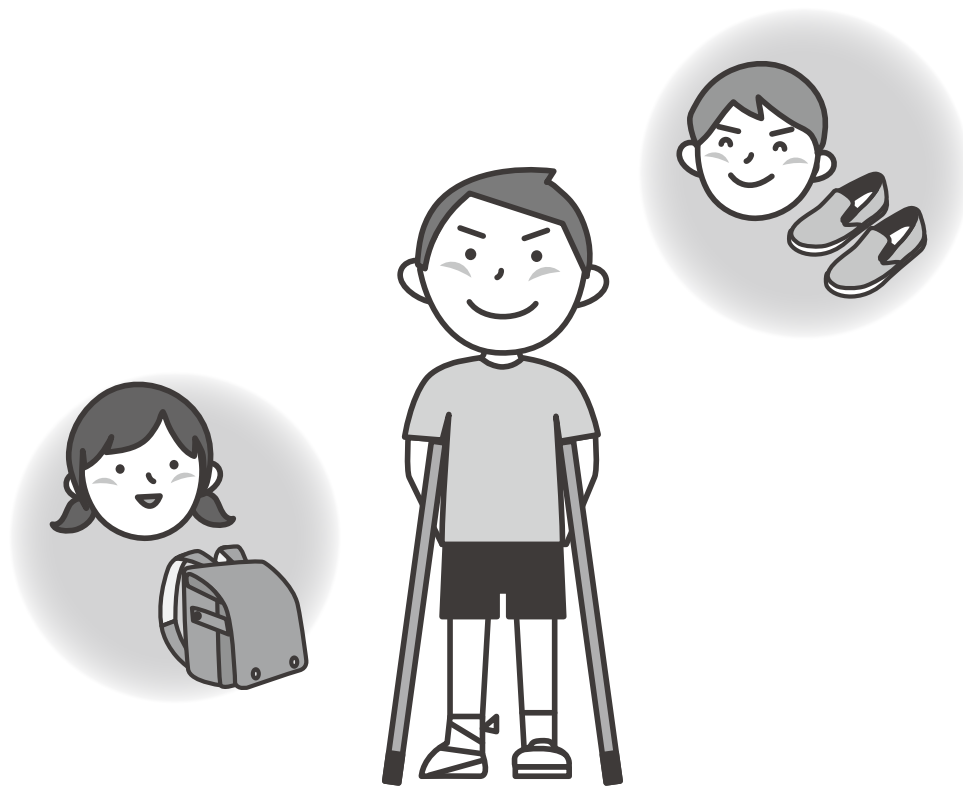
とおねがいしました。友だちは

「いいよ。」

とぼくの分もはこんでくれました。

ぼくはとてもホッとしました。

いつもぼくのランドセルをロッカーからもつてきてくれる友だちもい



ました。くつばこからくつを出してくれる友だち、いっしょにゆつくり歩いてくれた友だちもいました。ぼくはとてもたすかったし、とてもうれしかったです。

けがをして、ふべんなこともたくさんあったけど、友だちのやさしさや、親切のありがたみも分かりました。これから、だれかこまっている人がいたら、こんどはぼくが手つだつて、たすけてあげたいと思います。

しょうがいしゃとわたし

— 宮市立丹陽西小学校三年

小林 れい

わたしには、しょうがいしゃのいもうとがいます。いもうとは、四才です。わたしは、いもうとがしょうがいしゃだということがわかった時、「しょうがいってなんだ。」

と思いました。お母さんに聞いてみたら、

「ふつうの子よりせい長する速さが、おくられている子のことだよ。」

と教えてくれました。でも、わたしは、

「ふつうの子みたいだな。」

と思っていました。

でも、今では、ふつうの子は、ふつうに立てるけど、いもうとは、さえてあげないと立てません。そこで、母子通園という、しょうがいしゃの学校に入りました。そこには、やさしい先生や、楽しそうなしょうがいしゃの子がいて、わたしはそんな人たちを、「きょうだいで遊ぼう」という行事ではじめて見ました。そこにいた子は、いもうとと同じしうがいではありませんでした。そこにいてかんじたことは、

「いろいろなしょうがいしゃがいる。」

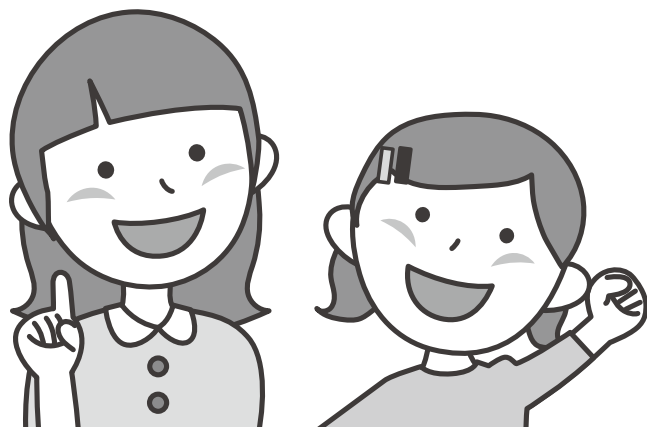
ということです。

「きょうだいで遊ぼう」では、さいしょにみんなで、歌を歌ったり、手遊びをしたりしました。つぎに、みんなでフラフラプをくぐりました。さいごに、かんそうをみんなで言い合いました。わたしは、そういうしうがいしゃのための学校があるということは、すごいなと思いました。

そのとき、いもうとは、家とはちがうかんじで、すごく楽しそうでした。そして、一つ上の人たちは、母子通園をそつぎようしました。一つ上の人たちの一人が代表で文集を読みました。そのとき、わたしが心にこった言葉は、

「このよには、しょうがいをもつ人と、しょうがいをもつかもしいれない人しかいない。」

という言葉です。どうしてこの言葉が、心にのこったかというところ、わたしのおおじいちゃんを思い出したからです。わたしのおおじいちゃんは、十年間ねたきりで、九十一才で天国にいつてしまいました。おおじいちゃんは、ふつうに生まれたけれど、年をとって歩けなくなつてしまいました。だから、おおじいちゃんみたいに、ふつうにそだったからといって、しょうがいしゃにならないわけではないので、どんなしょうがいをもちた人も、大切にしていきたいです。



大すきなわたしのひいおじいちゃん

一宮市立今伊勢小学校三年

深見 奏音

わたしの家族に、車いすで生活をしているひいおじいちゃんがあります。ひいおじいちゃんは、わたしがもうすぐ一さいになるという時に、びょう気でたおれてしまったそうです。いのちはたすかったけれども、体の半分がまひしてしまい、自分で歩くことができなくなりました。今まで当たり前のように使っていた手もかた方動かせなくなり、ごはんを食べることも着がえをすることもひとりではできない日がつづいたそうです。自分の体なのに、思ったように動かせないなんて、考えただけです。でも、ひいおじいちゃんは、今元気に生活しています。ここまでする八年の間には、ものすごく大へんな時があったけれど、ひいおばあちゃんやおじいちゃん、おばあちゃんのがんばりやおい者さんやヘルパーさんたちをはじめた皆さんの人がひいおじいちゃんをたすけようとして力をかしてくれたおかげで、ひいおじいちゃんは自分のしょうがいをうけ入れて、少しずつ元気になっていったそうです。

わたしは、ひいおじいちゃんの家に行くといつも声が聞こえる左がわに立って話をします。学校でのこと家族のこと、どんな話をしてもいっしょうけんめい聞こうとしてくれます。時どき話しかけてくれるけれど、半分くらいしか聞きとれません。だけど、何となく言いたいことはつたわってきます。体が大きくなり、車いすを動かすこともできるようになりました。家の中ではほとんど動かすひつようはないけれど、へやを移動する時など出番がくると、はりきって手つだいました。だんさに気を



つけ、ひいおじいちゃんの足がかべに当たらないように気をつけ、何よりもこわがらせないようにと気をつけながら。

少し前から、ひいおばあちゃんも体ちょうがわるくなり、ひいおじいちゃんはしせつで生活するようになりました。会いに行くと、ねていることが多いですが、そつと手をにぎると目がさめてわたしをじっと見つめます。そして、少しだけえがおになります。しせつの中は広いので、車いすをおしながらゆつくりとさんぽします。とちゅうで、いろいろな人に会い、あいさつをします。言葉をかわすときも、にこつとわらうだけのときもありますが、あいさつすると心がぽかぽかします。ここでの時間は、あつという間にすぎ、帰る時にはさみしくなります。さいごはいつも、

「また、来るね！かぜひかないようにすごしてね！」と手をにぎりながらつたえます。

わたしができることは、ほんの少しかもしれないけれど、ひいおじいちゃんが元気になれるならなんだってしたいなと思っています。そして、ひいおじいちゃんに元気をくれた人たちのように、わたしもたくさんの人に元気をだしてもらえようかなを思っています。

秋田せん手とぼく

刈谷市立東刈谷小学校三年

高槻

迅

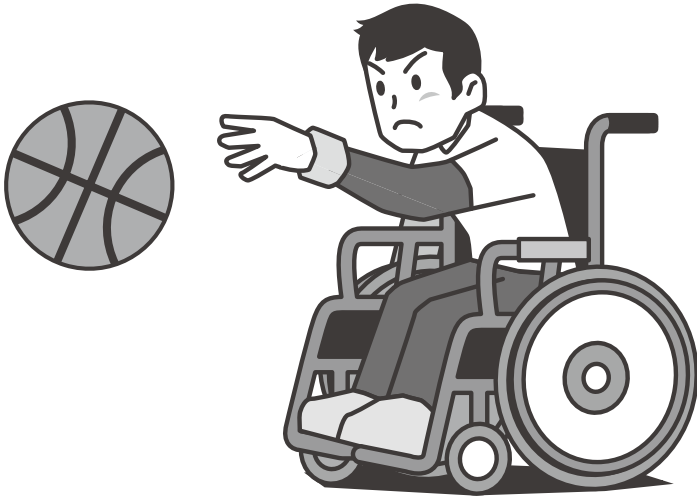
ぼくは、この夏休みに車いすバスケットボール日本代表の秋田啓せん手に会って、お話を聞いたり、実さいに車いすバスケットボールを休けんしたりすることができました。

秋田せん手は、足が不自由になってしまい何かスポーツをしようと考えた時、バスケットボールなら同じしょうがいを持った人が集まるから、仲間ができると思ったからと、言っていました。不自由になってからバスケットボールを始めたと言っていて、ぼくは、とてもすごいなあと思いました。また、すぐがんばって日本代表せん手になったんだと感じました。

そして、実さいに車いすに乗って、バスケットボール体けんをしました。車いすにすわったままドリブルをその場でしました。思うようにドリブルができなくてとてもむずかしかったです。その後、ドリブルを止めて、車いすを左回転してみたり、右回転してみたり、後ろへい動してみたりと動きました。まっすぐに進むのはできました。だけど、回転をするのは、なれるまで頭を使ってタイヤを動かさないとと思うようにできないので、すぐくむずかしかったです。しかし、見本を見せてくれた秋田せん手は、スムーズに車いすをあやつっていて、すぐくかつこよかったです。車いすを手で動かしながらドリブルを見せてくれた時、すぐくびつくりしました。なんでも手を使っての作業なので、すぐく大へんなスポーツだと思いました。ぼくも、車いすを動かしながらドリブル

をしてみました。思うようにできなくて、とてもむずかしかったです。さい後に、秋田せん手とバスケットボールの話をすることができました。もともとバスケットボールが大すきなぼくは、とてもうれしかったです。秋田せん手は、すごく前向きでがんばっているから、あきらめずにバスケットボールをがんばろうと思いました。ぼくは、はじめ、足が不自由な秋田せん手をかわいそうだと思いましたが、日本代表せん手になるくらいがんばっていて、かわいそうだと思う気持ちがなくなりしました。どこかが不自由になってマイナスな気持ちになったとしても、何かやりたいことを見つけて、がんばることが大切だということを学びました。

秋田せん手がバスケットボールをがんばっているように、ぼくも大すきなバスケットボールをがんばりたいです。



ひいおばあちゃんとデイサービス

北名古屋市立師勝東小学校三年

氣賀澤 湊

ぼくのひいおばあちゃんは、ろう人ホームのデイサービスに通っています。ひいおばあちゃんがデイサービスでどんなことをしているか知ることがなかったので、家に来ていたケアマネージャーさんに話を聞いてみました。

デイサービスに着くと、体温とけつあつをはかって体調のかくにんをします。おふろに入ってから、かん理えいようしさんが考えた昼ごはんをみんなで食べます。その後、手足の運動や頭の体そうを一時間して、はり絵やおやつ作り、生け花などのしゅみの活動をします。その間に、トイレのかいごをしてもらいます。そして、夕方家に帰ります。デイサービスに行くと、ひいおばあちゃんには、うれしいことや楽しいことがたくさんあるんだと思いました。

ケアマネージャーさんの仕事についても聞いてみました。一番大切なことは、一人ぐらしのおじいちゃんおばあちゃんに、こまったことはなにか、話を聞くことだそうです。ケアマネージャーさんが気を使っていることは、相談している時に、「大丈夫だよ。」とおじいちゃんおばあちゃんと言っているけど、むりをしていることが多いので、本当にこまっっていないかを見きわめることだそうです。ぼくは、「大丈夫だよ。」と言う一人ぐらしのおじいちゃんたちの気持ちが分かるなと思いました。

ほかには、デイサービスやおとまりの様子もかくにんするそうです。月に一回ずつ家をたずねて生活の様子も聞くそうです。かいごされてい



るひいおばあちゃんと、かいごをしているおじいちゃんおばあちゃんのように元気がどうかをかくにんします。それを四十五軒の家でしているそうです。大へんなんだなと思いました。

ひいおばあちゃんをかいごしている多くのひいおばあちゃんにも話を聞きました。ひいおばあちゃんのお世話で心配なことは、ひいおばあちゃんが夜中にしつかりねているかということだそうです。ひいおばあちゃんは、二年くらい前に夜中に家を出ていってしまって、歩いていたら転んでこっせつして歩けなくなり、きゆうきゆう車ではこばれました。だから、おばあちゃんは夜にそのことが心配でねられないことがあるそうです。

家族の人にとってふくしのサービスは大切です。いっしょにすんでいるおうちの人は、デイサービスに行っている間にせんたくやそうじなどの家のことができたり、休けいもできます。おじいちゃんとおばあちゃんがかいごしている様子を見ていて、大へんなんだなと思いました。

ケアマネージャーさんの話を聞いて、ひいおばあちゃんがデイサービスでどんなことをしているかや、今まで知らなかったことを知ることができました。今日は、ろう人ホームに行つて、ひいおばあちゃんがデイサービスで楽しくすごしている様子を見てみたいです。

子どもたちのお世話をして感じたこと

小学校高学年の部

豊橋市立汐田小学校四年

安原 成海

私はいつも学校が終わると児童クラブに帰っています。ふだんの生活では、宿題をやったり、マンガを読んだり、屋上でサッカーをしたりしています。

私の通っている児童クラブは、明照保育園という子ども園の中にあります。そこには、0才から五才までの園児が全員で二百六十人ぐらいいます。

私たちは夏休みに入ると、長い時間を児童クラブですぐすことになるので、交代で園児の保育をお手伝いさせてもらっています。私は夏休みに入つてすぐに0才児のクラスへお手伝いに行きました。0才の赤ちゃんは、まだ自分で立てない子、なれていない人を見ると泣いてしまう子、くいしんぼうでお友だちのおやつを食べそうになる子など、いろいろな子がいます。そこで私たちは、ふとんをたたむこと、おやつの前、いっしょに手を洗に行くこと、おやつを食べさせてあげることなどのお手伝いをします。赤ちゃんは、まだうまくしゃべれないけれど、「あーあ。」「うん。」などとお話をしてくれるところがとてもかわいいです。同じ赤ちゃんのクラスに何回かお手伝いに行っていると、赤ちゃんがしゃべらなくても、嬉しそうに笑う表情や、楽しそうにはしゃぐ動作で、赤ちゃんの気持ちや何をしたいのかがわかるようになって仲よくなれます。

私が赤ちゃんのクラスへお手伝いに行きたいと思ったきっかけは三つあります。一つ目は、一生けん命階段を上がる赤ちゃんを保育園の先生たちがお世話をしている姿を見て、私もお手伝いしたいなと思ったからです。二つ目は、私が園児の時に牟呂中学校の生徒が遊びに来ていっぱい遊んだ後、

「楽しかったよ、ありがとう。」

と言ってくれたのが嬉しかったことです。三つ目は、保育ボランティアに来ていた高校生が、

「めっちゃかわいかった。」

と言っていたので、「赤ちゃんってそんなにかわいいのかな。」と思ってお手伝いしてみたいと思いました。

このようなことから、だれかにやさしくしている人を見たり、自分がだれかにやさしくしてもらったりすると、人にやさしくしたい、人を助きたいという気持ちにつながると思いました。

明照保育園のような、小中高生や大学生、ボランティアの人が子どものお世話をするけんがでできる保育園や幼稚園、子ども園がふえたら、人にやさしくしたい、人を助きたいという人がふえると思います。



「幸せ」の運び方

豊橋市立幸小学校五年

中島

咲月

家のとなりにできた施設は、たくさんの人が利用していて、いつも楽しそうでにぎやかな声がします。施設が出来た時に何をしている場所かなと思ってみると、お母さんが、

「障がいのある人が生活する福祉施設だよ。」

と、教えてくれました。最近のお父さんの仕事も福祉にかかわることが増えたので、私は福祉ってなんだろうと考えるようになりました。

本で「福祉」を調べてみたら、「ふだんのくらしを幸せに」と書いてありました。どんなことなのか不思議に思っていると、お母さんが、

「福祉村で、親子福祉体験会があるよ。」

と教えてくれたので、お母さんと妹と参加することにしました。

福祉村は、想像以上に大きく本場に一つの村でした。福祉村を利用する人は、さまざまな障がいがある人や、お年寄りの人です。

福祉村の親子体験は、車椅子バスケット体験や、介護機器体験、高れい者疑似体験、福祉車両体験などができました。全部の体験に参加してみても、本当にいろんな人が助けを必要としていて、そして施設のたくさんの方が他の人を幸せにしているんだなと感じました。

私には、ひいおばあちゃんがいます。ひいおばあちゃんはすごく元気で、働き者でどこまでも自転車で行ってしまいます。ご飯ももりもり食べて、いつも笑顔で優しいです。体験のなかで高れい者疑似体験をやったときに、「うそだ。」と思いました。自分の想像していたこととは全然



ちがったのです。少し体が重くなったり、背中が曲がったりするのかな
と思っていたら、ひざは伸ばせないし、腰も首も曲がったまま。ゴーグ
ルで周りがほとんど見えず、周りの人の声も聞こえにくくなりました。
目の前で一生懸命に施設の人が私に向かって話をしてくれるのだけど、
うまく返事ができませんでした。体が思うように動かず、体験セットを
早く脱ぎたい、おばあちゃんになりたくないと思っていました。体験が
終わって器具を一つずつ取ると十才ずつ若返った気がしました。全部脱
いだ時は、本当にすっきりして、今の自分に戻れて安心しました。でも、
もしこれが私のひいおばあちゃんの体にも起こっているのなら、今まで
はスーパードキドキおばあちゃんだと思っていたけれど、これからはスーパ
ミラクルひいおばあちゃんだと思いました。やりたいことが、自由に
思いっきりできることはすてきだなと思ったし、元氣そうに見えても、
ひいおばあちゃんの体の中でも大変なことはあるのかもしれないと思う
ようになりました。

昔遊びの体験コーナーでは、施設のおばあちゃんたちが、折り紙の折
り方を教えてくれました。先に行った妹の様子を見に行くと、妹が先生
になり、おばあちゃんに折り紙の折り方を教えていました。おばあちゃ
んは、真剣に妹の手つきを見ながら、

「それで、それで。」

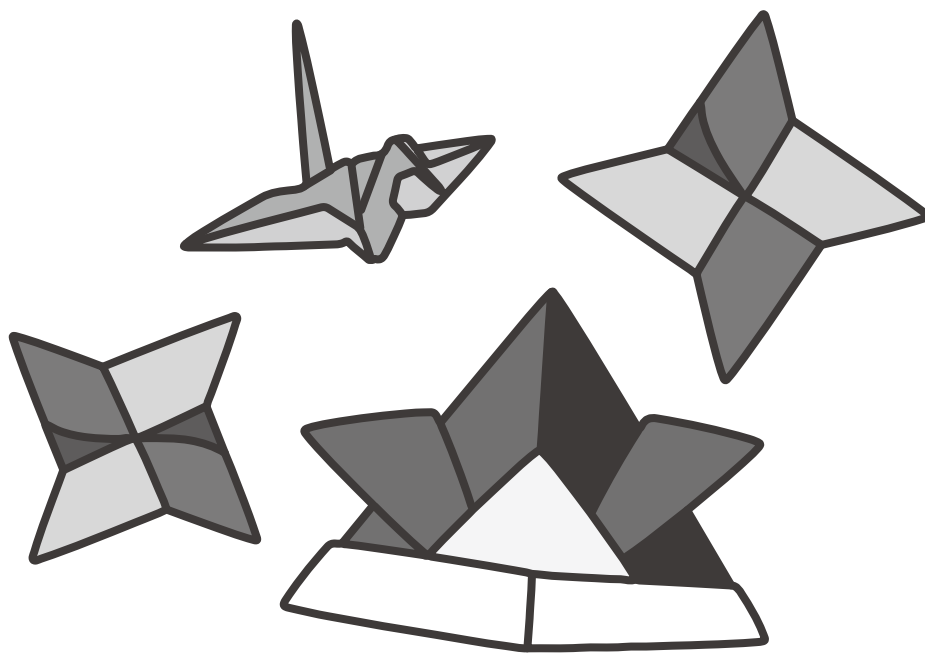
と、楽しそうに話を聞いています。妹も得意になって

「だからさ、ここはこうだってば。」

とビシバシ教えていました。わたしは、教える人の立場が逆になってい
てびっくりしたけど、うれしそうなおばあちゃんと妹の笑顔を見て、呼
びに行った私もお母さんも幸せな気分になりました。福祉は「幸せ」と
書いてあったけど、そこには大きな機械や最新の設備がなくても、たく
さんの笑顔がある幸せな空間がありました。人とかかわりも福祉には
大切なんだと思いました。

私は、今まで障がいがある人を正直こわいなと思ったことがありまし

た。今回の体験を通して、それはただ私が知らなかっただけだったのだ
と感じました。何かが足りないならば、周りの人とおぎなひ合えばいい。
福祉を大切に考えることは、私にもできるみんなへの幸せの運び方なん
だと思いました。



ぼくとおばあちゃんとの時間

豊川市立桜町小学校五年

小野原

絢心

ぼくのおばあちゃんはすごくやさしい。面どう見がよくって元気で明るい。ぼくはそんなおばあちゃんがずっと大好きなんだ。そんなおばあちゃんが去年の秋にも膜下出血という病気で倒れた。ぼくはこわくて仕方がなかった。それからぼくの家族の生活は色々変わった。五ヶ月間ぼくの家の側の病院に入院して毎日リハビリを頑張っていた。初めぼくはベッドで寝ているおばあちゃんを見て、信じられない気持ちとショックでどうしていいか分からなかった。パパやママ、よくや弟が話しかけてもぼんやりして反応もなくてとても悲しかった。インフルエンザの時期になり、ぼくも弟も病室へ入れない日が続いた。パパやママが毎日通ってどんどん話しかけたり汗をふいたり回りのお世話をしていた。何も出来ない事がつらかった。そんな時パパがうれしそうに帰ってきて「今日おばあちゃん少し声が出たよ。」

と言った。家族みんな喜んでかんぱいした。本当にうれしかった。それから少しずつ良くなってきているようにぼくは少し安心した。

インフルエンザの時期がすぎるとぼくも弟もほぼ毎日、ママとおばあちゃんの所へ通った。ママもパパもリハビリの先生から色んな所のリハビリの仕方を教わり、毎日一生けん命おばあちゃんの体を動かしてた。

五月になるとおばあちゃんはお家のある岡崎のし設へ引っこして、ぼく達は毎週末会いに行っていた。顔を見せると笑顔になる時もあるけど全然分かってくれない時もあるけどママは

「まごに会えると本当にうれしいんだよ。」
と言うので、その週にあった事を色々話したり肩をもんだりしていた。ぼくはもつとおばあちゃんに何かしてあげたいと思った。

その週末に会いに行った時、リハビリのやり方を教えてもらって挑戦してみた。おばあちゃんはおくがおそろるおそろるうでや足を動かすと、一生けん命自分なりに動かしてくれてるようで心が通じあつてるような気がしてうれしかった。その日は、おばあちゃんも元気で少しだけ住んでいたお家へ連れていくために、家族みんなでおばあちゃんを車へのせてお家まで運んだ。みんな初めてで汗をダラダラ流しながら必死なのに笑顔で何だか楽しかった。おばあちゃんも久しぶりの家に帰れてほっとしているように見えた。

思えば、パパもママも今までと比べて本当に大変だったと思うけど、でもパパもママもおばあちゃんへの不満は一度も言っていない。毎回毎回笑顔で接している。そしておばあちゃんもその笑顔を見て笑顔になる気がする。それからリハビリの先生や看護師さん、おばあちゃんの回りはいつも笑顔であふれている。

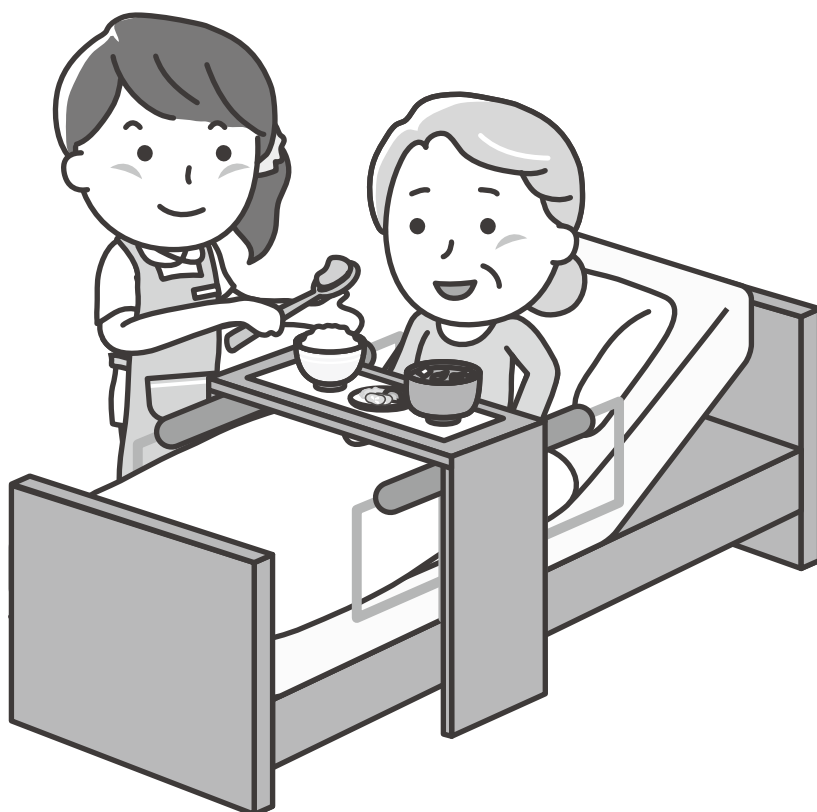
「今まで介護なんてまだまだ先の事と思ってたけどちがった。」

とママが言った時があつた。ぼくもまさか自分のおばあちゃんに介護が必要になる時が来るとは思ってなかったし、介護という言葉もピンときてなかった。今でもおばあちゃんの手や顔をふいてあげたり、リハビリを手伝ったりは出来るけど、ぼくにはあと何が出来るだろう。ぼくがやってくる事はおばあちゃんが喜んでくれるのか自信がなくなる時もある。

「大じょうぶ。そうやって考えてくれるだけでおばあちゃんすごくうれしいんだよ。絢心の気持ち伝わってるよ。もう介護してる人だよ。」
ママが言ってくれた。少し心が軽くなった。

おばあちゃんは今までよく達まごや家族のためにご飯を作ってくれたり色んな所へ連れてってくれたりいつもかわいがってくれた。

でもぼくはおばあちゃんが倒れるまで気付いてもなかった。きつと弟



もいとも同じだったと思う。だから今度は、ぼく達がおばあちゃんに出来る色々な事を手助けしてあげたい。とりあえずたくさん笑顔を見せてあげたい。それから、世の中みんなが介護を必要になった人と同じ気持ちをもてたら、そんな世の中になったらいいなと思った。

ひいおばあちゃんにくらして

知立市立知立南小学校五年

清水 音花

今年の一月からひいおばあちゃんといっしょにくらすようになりました。ひいおばあちゃんは、大正十四年生まれで九十二才になります。いっしょにくらすことになったのは、ひいおばあちゃんが少し体調をくずしたとき、身のまわりのことを自分ですることがむずかしくなってしまったからです。それまでは自分で食事を用意して、うら庭にある畑の野菜の世話もしていたそうです。また、毎年お正月やお祭りのときには、いっしょに食事をしました。そのときのひいおばあちゃんは、よく食べて、大きな声で笑って、とても元気なおばあちゃんだなと感じていました。でも、いっしょにくらすことになり家にやってきたひいおばあちゃんは、私の知っている様子とはちがっていました。いつものような笑顔も、元気や食欲もありませんでした。私はとても心配になりました。私だけではなく、家族みんながひいおばあちゃんに元気になってもらいたいと思いました。私は自分に何かできることはないかと考えました。慣れない家でくらすのだから、はじめのうちはトイレの場所もわからないだろうし、電気のスイッチもどこにあるかわからないだろうと思います、おばあちゃんがトイレに行くときは、私がつれていってあげようと思いました。私がつれていってあげると、おばあちゃんはとても喜んでくれました。家での生活に慣れてきたころには、おばあちゃんの体調もだんだん良くなり、デイサービスに通えるようになりました。

ひいおばあちゃんにくらしてみても気づいたことがあります。それは、

ひいおばあちゃんの体調が回復して元気になっても、お父さんやお母さんのように重い物を運んだり、素早く動いたりすることができないし、私と同じご飯を食べることもできないということです。

ひいおばあちゃんの食事は、私のおばあちゃんがつづいています。ご飯はおかゆのようにやわらかくたいてあって、おかずは野菜やお肉が小さく切ってあってとてもやわらかくにありました。ひいおばあちゃんが食べやすく、飲みこみやすいように工夫してありました。このご飯はひいおばあちゃんしか食べません。ひいおばあちゃんのために、毎回特別な食事を用意しているおばあちゃんはずいと思えました。また、ひいおばあちゃんにとっては、お風呂に入るのも大変なことです。一人では入れないので、おじいちゃんがひいおばあちゃんをかかえて湯船に入れたあげました。私たちなら簡単に浴そうをまたいでお湯につかることができるけれど、ひいおばあちゃんにとって、ぬれていてすべりやすいところはとてもきけんで、高いだん差を乗り越えることはできないのだなと思いました。

たくさん年をとると、今私がふつうにできていることもできなくなるのだと思うと悲しくなります。ひいおばあちゃんは耳が遠くなって、人が話している声はほとんど聞こえないようです。でも、ホワイトボードに伝えたいことを書いてひいおばあちゃんと会話することができず。ひいおばあちゃんは、私や妹が学校から帰ってくるとうれしそうにしてくれます。テストや漢字ノートの丸を見てたくさんほめてくれます。耳は聞こえないだろうけれど、音読をするのを楽しみにしてくれています。ひいおばあちゃんにくらすようになって、大変なこともあるけれど、私のことをたくさんほめてくれるので、とてもうれしいし、今まで気づかなかったお年よりのことに気づくことができて良かったと思います。

もうすぐ敬老の日があるので、大好きなひいおばあちゃんと、いつもひいおばあちゃんのお世話や、私と妹の面どうを見られるおじいちゃんとおばあちゃんに感謝の気持ちをこめて、妹といっしょに計画を立てています。

白いつえのおじいさん

田原市立中山小学校五年

荒木 咲良

これは、去年の秋、わたしが友達と図書館へ行ったときの出来事です。わたしと友達は日曜日、地域乗り合いタクシーで図書館へ遊びに行きました。図書館では、漢字テストの勉強をしました。帰りのバスの時刻になったので、バス停で待っていたバスに乗りこみました。出発時刻まではまだ時間があったので友達とおしゃべりをしていました。そのとき、運転手さんが、

「あれ、目の見えないおじいさんが乗るはずなんだけど。」

と言いました。その声につられて、わたし達は周りを見ました。すると遠くの方で点字ブロックが二つに分かれているところで見えている様子のおじいさんがいるのを見つけました。わたしはあの人かなと思います。そこで運転手さんに、

「もしかして、あの人ですか？」

と聞きました。運転手さんは

「あ、そうそう、あの人だよ。」

と言いました。わたし達は、

「連れてきますか？」

と言いました。運転手さんは、

「じゃあ、たのんできいな。」

と言いました。わたし達は走っておじいさんのところへ行きました。わたし達は、勇気を出して、

「すみません。バスに乗りますか？」

と声をかけました。おじいさんは、

「はい。乗ります。」

と言いました。

「わたし達もバスに乗るんですけどいっしょに行きますか？」

わたしが聞くと、おじいさんが、

「ありがとね。おねがいます。」

と言いました。そのとき、おじいさんがにこっと笑いました。わたしはその笑顔を見て、何だかとてもうれしくなりました。わたし達はおじいさんの手を取ってバス停へ連れて行きました。バスに乗ると、おじいさんがわたし達に小学校、学年、名前を聞きました。わたし達が答えると、かくにんするように名前をくり返し、最後にまた、

「ありがとね。」

と言いました。

家に帰るとすぐにわたしは今日あったことをお母さんに話しました。お母さんは、

「へえ、えなかったね。」

と言ってくれました。わたしは何だかほろらしい気持ちになりました。

二、三日後、たんにんの先生がクラスで、

「日曜日に図書館で目の見えない人を助けてくれた人がいるという電話が入ったんだけど心当たりがある人いますか？」

と話されました。わたし達は顔を見合わせました。そして、そつと手を挙げました。少しはずかしくて、でも何だかうれしくて複雑な気持ちになりました。その後、先生にもほめられとてもうれしい気持ちになりました。

わたしは、目の見えないおじいさんをその後も近くのショッピングセンターでも道でも何度も見かけます。そのとき、地域の人やお店の人に手を引かれていることがあります。今までずっと近くに住んでいたはず

なのわたしは一度も気がつきませんでした。まさか自分が住んでいる地域に、目の見えない人が生活しているなんて思ってもいなかったからです。

今回の経験でわたしは、目の見えない人は白いつえを持っているということ、目の見えない人は助けが必要なきがあるということ、そしてそのときはすぐに行って手助けをしないとおたがいが幸せな気持ちになれないということを学びました。これからは、一人のときでも困っている人を見かけたら、勇気を出して声をかけて行きたいです。



ヘアドネーションを体験して思うこと

みよし市立中部小学校五年

中村 愛依

みなさんはヘアドネーションという言葉を知っていますか。ヘアドネーションとは、病气やけがによって、かみの毛がぬけてしまった子どもたちに、きふされたかみの毛で医りよう用のかつらを作ってあげるボランティア活動のことです。ヘアーがかみの毛で、ドネーションがきふするという意味です。

私はヘアドネーションという言葉を三年生の時に知りました。お母さんの職場の人が、病気で苦しむ知り合いの子どもに何もしてあげられなかったそうです。その時に自分ができるとしようと思い、三年間かみの毛を伸ばして、きふしたと聞きました。そこで、私も病気で毛がぬけてなくなってしまうたらと、考えてみました。かみの毛がぬけてしまった子は、いろいろなかみ型にできるかみの長い子にあげられていると思いました。それに女の子だったら本当に悲しい、苦しい気持ちになると気づきました。調べてみるとヘアドネーションは三十一センチ以上のかみの毛の長さが必要で、小学生の私でもできることがわかりました。その時の私のかみの長さはまだヘアドネーションできる長さではありませんでした。伸ばしてきたかみの毛をばつさりと切ることはとても勇気がいることです。しかし、私がかみの毛をきふすることで、かつらを必要としている子たちの役に立つなら、やってみようと強く思うようになりました。私はお母さんにヘアドネーションをすると宣言し、協力してもらい、その日からかみの毛を伸ばし始めました。

かみの毛が長いと大変なことが、たくさんあります。シャンプー液もたくさん必要だし、洗い流すのも大変です。かみの毛が長すぎるから切ったら？とよく言われました。ヘアドネーションのことを知らない人も多く、説明するのも大変だったことの一つです。

そして四年生の冬、ついにヘアドネーションに必要なかみの長さになり、実行することになりました。当日、私はとてもドキドキしました。さんちようもしていました。でもわくわくという気持ちの方が強かったです。なぜかという、私のかみの毛が、誰かの役に立ち、喜んでもらえると思ったからです。

実際に長かったかみの毛を切ってみると、やってみてよかったと思いました。ヘアドネーションを知らなかったら、かみの毛はゴミとして処分されていたと思うと、本当にやってみてよかったです。

次の日、ショートカットになった私を見ていろいろな人にとってもびっくりされました。その時にヘアドネーションの話をすることで、私の周りにいるたくさんの人に、ヘアドネーションのことを知ってもらえたと思います。

私は自分自身がこの活動のことを作文に書くことで、周りの人に関心をもってもらえたり、知ってもらえたりすることができたと思います。私はヘアドネーションでかつらをつけた子が幸せな気持ちになれることを願っています。はやく回復して自分のかみの毛を取りもどしてほしいです。

これから私は健康な体に感謝し、ふたたびかみの毛を伸ばしていきたいと思います。そして、今よりも、もっとヘアドネーションというボランティア活動の輪が広まってくれるといいなと思います。

見える障害と見えない障害

一宮市立萩原小学校六年

岩田 麻宏

ぼくのおばあちゃんは六十一才です。そんなおばあちゃんが二年前、大変なことになってしまいました。それは、骨に腫瘍ができて、痛みで全く歩けなくなってしまったのです。それまでは、自転車も乗れるし、歩行もなんなくできていました。それがある日、とつ然、

「足が痛いよう。」

と言い出し、痛みで歩けなくなってしまいました。幸い、動かなくなっただけは片足ですが片足だけでは歩けないので車いす生活となってしまいました。

入院中、ぼくはお見舞いに行きました。そうしたら、病室に車いすが置いてあったので、ぼくは、興味本位でその車いすに乗ってみました。車いすに乗る前は、簡単にそうさができて、ミニカー感覚で楽に乗れると思っていました。以前、車いすに乗っている人を見たことがあります。その人も簡単そうに乗っているように見えました。しかし、いざ乗ってみると、とても難しく、特に難しかったのは、曲がることです。片方のタイヤを止めないといけないので、その感覚がつかめなく、うまく曲がれません。車いすに乗ってみて、簡単そうに見えても、乗っている人は苦勞して、せまい所も通れないからすごく大変なのが分かりました。

では、車いすに乗っている人の気持ちはどうでしょう。車いすに乗っているおばあちゃんに聞きました。おばあちゃんは、

「私はまだ病院内だけの行動だから、大丈夫だけど、それでも、おどろいたことがあったよ。よそ見をして歩いている人がいて、ぶつからないかあせったことがあったよ。」

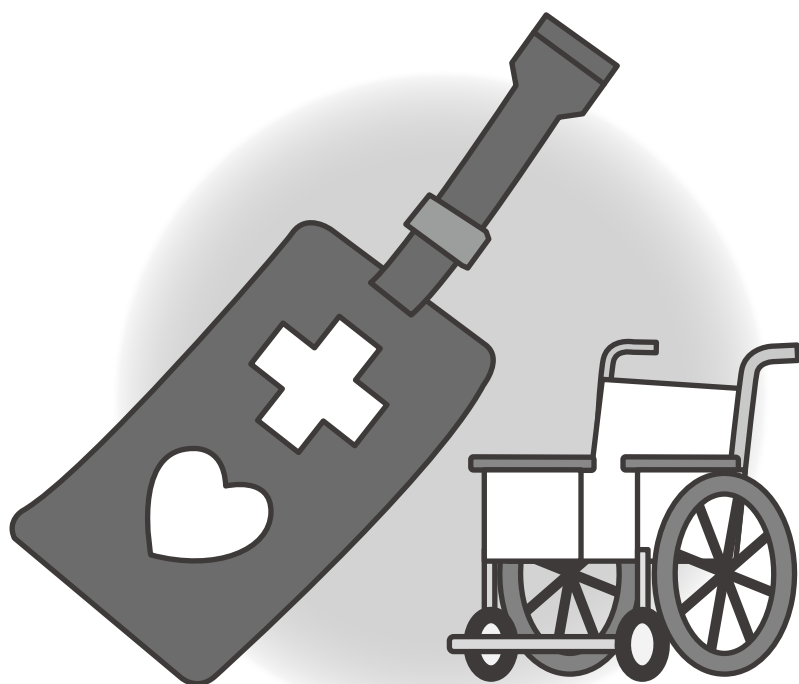
と言っていました。車いすだと、ぶつかりそうになってもすぐによけることができないので、危険だということが分かりました。このことからぼくは、車いすの人を見かけたら、できるだけ通りやすいように道をあけてあげることや、よそ見をせずに車いすの人が安心して運転ができるように周りも気を付けることが大切だということを学びました。

おばあちゃんは人工の骨を入れる手術をしました。リハビリをして、今では少し足を引きずっているけど歩けるようになりました。けれど、長時間立っていたりするとまだ痛みが出るそうです。

この間、おばあちゃんは電車に乗りました。その時は、席があいていなくて立ちっぱなしになってしまつて、足が痛くなってきたので、辛かったと言っていました。もし、ぼくが席にすわっている人の立場だったら、足が悪い人が来たら席をゆずると思います。どうして席にすわっていた人はゆずらなかったのでしょうか。それは、おばあちゃんのように、足が悪いのか見た目では判断できない人に対して、すわっている人はそれに気付くことができずに席をゆずれなかったんだと思います。おばあちゃんの病気は見た目では分からないので、周りの人からの援助や理解が得られにくいのです。

この間テレビで、名古屋駅で「ヘルプマーク」を配る活動をした、というニュースを見ました。ぼくは「ヘルプマーク」というものを、それまで全く見たことも聞いたこともありませんでした。「ヘルプマーク」とは、外見からでは障害があるか分からない方々が、周りに援助や配慮を必要としていることを知らせることで援助を得やすくするマークです。障害は見た目だけではないことを周りが理解することで、差別の目を向けることがなくなると思います。おばあちゃんもこの「ヘルプマーク」を付けていたら周りが気付いて手助けしてくれていたかもしれません。

でもこのニュースを聞くまで、ぼくも知らなかったから、知らない人が多いのが現状だと思います。せっかくなのでマークがあるのにみんなが知らなければ意味がないと思います。だから、たくさんの人に知ってもらうことが大切だと思います。そのためにぼくは周りの人に教えたいと思います。そして多くの人に伝えられていけたらいいと思います。



目にみえる障害、みえない障害

一宮市立葉栗小学校六年

鈴木 心夢

今まで私は、『障害』と聞くと、特別支援学校交流で出会ったような、体が不自由で、見ただけでも障害だとわかるような人のことを考えていました。でもお母さんが働いている『いずみ学園』には、ぱっと見ただけではどこが障害なのかわからない子がいると聞いて「目で見ただけではわからない障害って、どんな障害なんだろう」と思い実際に体験させてもらいました。いずみ学園は、発達におくれやかたよりのある三歳から五歳の子供達を一人ひとりの特性に合わせて心身の発達をうながしたり、保護者の養育支援を目的としている施設です。そこに通っている子供達は、私の考えていたような子とはちがいに最初に見た時は障害のないふうの子達に見えました。しかし、体験で接していくと上手くしゃべれなかったり、話しかけても反応しなかったり、落ち着かず走りまわってしまいわれたことができなかったりする子が多くいました。中には上手くしゃべっていたり、話を通じる子もいました。その時私は思いました。「この子は一体何の障害なんだろう。ふつうに見えるのにどうしてここに通うのだろう」と思い聞いてみました。すると「この子はふつうそうだけど、落ち着けなくて何でもすぐに動いて危ないからここに通っているんだよ」と教えてくれました。本当に見ただけでは分からないような障害もあるんだなと思いました。

子供達は一人ひとりがちがう障害を持っていて、教室にもたくさん工夫がされていました。ごみ箱が子供の手のとどかない場所にあったり、

ダンスを開けないようにとめ具がついていたり、時間割りを言葉ではなく絵や写真を使って表したりしてありました。障害者のために身近な物にも工夫がしてあってすごいなと思いました。そして障害を持った人が生活しやすいように環境を整えたり、工夫することを『合理的配慮』ということを教えてもらいました。他にも専門の音楽療法士、作業療法士、言語聴覚士など、保育士だけではなく、色々な人が子供達の発達の手助けをしていました。私が今回体験したのは音楽療法で、音楽療法は楽器を使って演奏したり、歌を歌ったりして落ち着けない子を落ち着かせたり、体でリズムを感じ、楽しむ事を目的とした訓練をしていました。作業療法では、その子に合った運動遊びをし、言語訓練では、言葉の発達をうながす遊びをしているそうです。障害があっても、色々な経験をすることで成長したり、楽しく過ごせたりするように考えられているんだなと思いました。

私は子供達と関わる時に何でもすぐ手伝ってあげようとしたけど、先生達は子供達ができる所は見守って、できない所だけ手伝っていました。障害があるから何でもできないと決めつけて、やってあげるのではなく、できる所は経験させて、できない所は手伝って、できることを増やしていくようにしているという事を知りました。それを聞いて私も子供達と関わる時にはその子供が自分で何かをしようとしている事を見守り、できなくて困っている時に手伝うようにしました。

今回いずみ学園で体験をさせてもらい、体の不自由な目に見える障害だけでなく、目には見えない、ぱっと見ただけでは分からない障害をもった人もいるということを知りました。目に見える障害は周りの人もすぐ気付く手助けすることができると、目に見えない障害は困っている周りの人達は気付くにくいと思います。私は、見えない障害にも気付いて手助けしたいけど、実際には気付くことは難しいと思います。でも、お母さんに色々な障害についてもっと教えてもらったり、また、いずみ学園のような福祉施設を体験したり、お手伝いをしたりして、障害で困

っている人たちの力になりたいと思います。



はじめの一步

幸田町立深溝小学校六年

天野 友紀菜

「アルツハイマー型認知症です。」

四月四日、私は安城の病院でおじいちゃんの病名を知らされました。私は半信半疑、おばあちゃんは不安そうで、お母さんとおばさんは真顔で受け止めていました。いちばんショックを受けていたのはおじいちゃん、まさか自分になるなんてという様子で、やっと出た一言が、「ごめんな。」でした。初めて見たおじいちゃんの悲しそうな顔で、私まで涙が出そうでした。私ができることは何かあるかなと思い、お母さんに聞いてみました。

「ゆきちゃんがおじいちゃんといっぱい遊んであげればいいんだよ。」
と言ってくれました。

簡単な計算問題、オセロやすごろくなど、おじいちゃんの家に行ったときは必ずいっしょにやるようになりました。おじいちゃんに宿題を出し、毎日少しずつやるようになりました。すごろくは、あきないようになり毎回ルールを変えました。そして、神経すい弱や迷路など、頭を使って楽しむ遊びをたくさんやりました。おじいちゃんはとても楽しくゲームをやってくれたので、私はうれしかったです。

夏休みに入ると、おばあちゃんから電話で、「ゆきちゃん、もう計算問題持ってこなくていいよ。」と、ちょっと悲しそうな声で言われました。電話を切った後、お母さんは、

「おじいちゃんは、ゆきちゃん先生にちょっと疲れちゃったのかな。」と私の頭をなでました。私はその時気付きました。採点しながら「なんでこんな簡単な問題ができないんだろう。」という気持ちで、態度に出ていたのかもしれない。私はまだ認知症についての知識があまりなくて、自分の思いだけでおじいちゃんに接していました。

私にとっては今までと変わらないおじいちゃんです。私にすごろくでずるをしてみたり、字をわざとまちがえて読んで私を笑わせるのが好きなおじいちゃんです。そんなおじいちゃんが検査をすることになったきっかけは、今年のお正月に財布をなくしてしまったことでした。どこかにしまったのか、初もうでで落としたのかも分からず、親せきみんなで探したのです。私はそのときおもしろ半分を探していましたが、それから数か月、おばあちゃんは大変だったそうです。

八月二十二日、中央公民館で「認知症サポーター養成講座」に参加しました。幸田町地域包括支援センターの方が、クイズやゲームで分かります。認知症のことを教えてくれました。基そ知識、症状、認知症の人への対応など、たくさんのお話を学ぶことができました。いちばん心に残ったのは、認知症の意味です。「認」とは認める、見分ける、見極めること。「知」とは知る、心に感じる、物事の道理が分かること。「症」とは病気のこと。認知症は、良くなることがあり、大切なことは、優しく声をかけること、急がせたりおどろかせたり、プライドを傷つけたりしないことだそうです。私はおじいちゃんに対して優しくしていただろうか、プライドを傷つかなかっただろうか、と考えました。認知症は、だれにでも起こりうる脳の病気で、私も数十年後には認知症になっているかもしれません。そのときに私に優しく声をかけてくれる人がどれだけいてくれるだろうと思いました。「認知症サポーター」とは、認知症の人たちを温かい目で見守る「認知症の応えん者」だそうです。その印として、オレンジリングをもらいました。とてもうれしくて、どきどきしました。なぜなら私には介護士になるという夢があり、少し近づけた気が



したからです。はじめの一步をふみ出すことができたのです。これから、おじいちゃんのため、地域の認知症の人のため、応えん者として成長したいです。講座で学んだことを生かして、前よりもおじいちゃんに優しく接していきたいです。

中学生の部

心情の変化から学んだこと

愛西市立八開中学校二年

吉川 菜月

「相手の気持ちを考える」今まで私は人の気持ちをよく考えて行動・言動をしている方だと思っていた。しかし、ある経験を通してその大切さが相手にどう関わるかを深めるきっかけとなった。

私は、今年職場体験で障害者支援施設に体験にいった。正直いって自分の行きたい所にいけず、仕方なく行くことになっていた。私の気持ちは始まる前から沈んでいたことをよく覚えている。それは、障害者の方々への偏見の目で自分が実際に見たこともないのに周りの勝手な印象から私も勘違いしていたんだと思う。しかし、そこは想像するよりもはるかに印象深く、心が温まる所だった。

初日。私は障害をもっている方々と、どう接するか考えていなかった。初めに職員さんが、

「一人の人間として責任を持って、一緒に楽しみながら関わってね。」と言われたことを今でもよく覚えていて。この意味の深さに初めのうちは全く感じていなかった。施設の内容は、どれも利用者さんと一緒に楽しむものばかりだった。どうしたら利用者さんは笑ってくれるのか、行ってくれるのかなど職員さんの工夫が詰まっているものばかりで、とても驚きが大きかった。この施設は、軽度の障害の方からしゃべることでもできず寝たきりの状態で過ごしている方もいる。私は、どう接したら

いいのか分からず不安ばかりを抱いていた。午後の活動で、「音楽療法」という活動を行った。一人ずつ楽器をもち音楽に合わせて楽器を叩いたり、鳴らしたりする活動だ。私は、寝たきりでしゃべることもできない利用者さんにつくことになった。私はどうしたらいいのか分からずその場でただその人を見ているだけだった。しかし、その瞬間私の考えを裏返す出来事が起った。それは、職員さんが楽しそうに利用者さんに話しかけている姿だった。それはまさに「自然体」だった。私も言われるがままに利用者さんに手を添え、

「楽しいですか?」「いい音ですよ!」

など楽しく喋りかけた。すると少しだけ利用者さんもうれしかったのか口角を上げてくれた。私は、その表情をみて心の中までが温かくなった気がした。とてもうれしかった。私の心は徐々に変わってきてると、この時は気付かなかったけど。

二日目。私は、初日の体験から考えて「接する」ことより「一緒に楽しむ」ことの方が利用者さん私も嬉しくなり、よい関係が作れる大切なポイントになると思う。それが体験中のやるべきことなのだと思った。朝のお迎えから初日より気合を入れ笑顔で楽しみながら全てをこなしていった。この施設で大切にしていることは、「利用者さんができることは利用者さん自身で行う」ということだ。靴をはくこと、朝・帰りの会の進行などその人それぞれができることを私たちがサポートする。とてもいい考え方だと思う。笑顔で楽しく接することが自然になってきたら、一人の利用者さんが私の手を握り私たち体験生の輪の中に入ってくれた。利用者さんに喋りかけると笑顔で反応してくれたり、私たちの会話で笑ってくれたり、その握られた手は離れることはなかった。なぜか私までもが嬉しくなり心は冷めることはなかった。その後活動でトランポリンを行った。私たちが乗り、揺らすと利用者さんの笑顔は消えることなく周りの環境も良くなっていった。私の心は次第に大きく変わっていることに気が付き始めてきていた。

最終日。「もう終わりか」という気持ちがとても強くなっていた。利用者さんとも大分打ち解け自分から利用者さんの所に行き楽しく関わることが出来るようになってきたのに終わりかと思うと寂しく思っていた。最後の活動は「みんなでケーキを作る!」という内容だった。一人ではできないことが多くても私が手助けをして一緒に楽しみたいという気持ちが強かった。そこには職員さんの工夫を感じることができた。利用者さんの手を支え、一緒に笑顔を促すことなく行うことができた。それは私の心の底からの笑顔だった。行く前とは別の感情が生まれたと気付いた瞬間だった。

今回の職場体験で一番感じたことは、利用者さんと一緒に自分も楽しむことだと思った。最初の頃に抱いていた偏見の目は、勝手な印象で本当はとても温かい人たちばかりだった。また、職員さんは利用者さんのために自分たちは何をすべきかが明確になっていた。この施設は温かい心をもっている人ばかりだった。これから私は、「相手の気持ちも考える」ことから自分もそのために一緒に笑顔になることを心がけていきたい。その笑顔は私の自然であると思う。この職場体験で私の考え、感じ方が大きく変わることができた。



私のひいおばあちゃん

飛島村立飛島中学校二年

種村 莉里

私には九十二歳になるひいおばあちゃんがいます。ひいおばあちゃんとの思い出はたくさんあります。保育所のお迎えに来てもらったり、一緒に公園へ行ったり、トランプやオセロで遊んだり、数えきれないほどです。私はいつもおんぶしてもらっていました。そのときにひいおばあちゃんが、「大きくなったらわしがおんぶしてもらわないかなあ」と言っていたことを覚えています。いつも優しく、元気でとても明るいひいおばあちゃんでした。

去年の冬、ひいおばあちゃんの人生を一変させる事件が起きました。夜、トイレへ行こうとしたときに、転んで腰を骨折してしまったのです。入院はせず、家で生活することになりましたが、歩くことはできません。毎日の楽しみだった喫茶店へ行くことも、五歳になる妹と遊ぶことも、畑仕事をすることもできなくなりました。私がひいおばあちゃんに会いに行く、喜んでくれていましたが、今までとは違って「痛い」が口ぐせの弱々しい姿になってしまいました。

あるとき、ひいおばあちゃんが「トイレに行きたい」と言ったので、私も力になろうと思いました。寝ている状態から起こして、トイレへ座らせなければいけません。私は分からないながらに、まず肩の下に手を入れてみました。そこから起こそうとしたものの、「痛い、痛い」と言います。ずっと痛い思いをするより、一瞬の方が良いと思い、力ずくで起こしてみると、なんとか起こすことができました。まだまだ試練は終わ

りません。次は、少しおしりを浮かせてズボンを下げます。立てないひいおばあちゃんのことを浮かせるのはとても大変でしたが、無事にトイレを済ませることができました。しかし、またベットまで戻らないといけないと思うと、腰がぬけそうでした。でも私がそんな話をすると、ひいおばあちゃんはいつも申しわけなさそうな顔をするので、私は頑張りました。私もずっと同じ体勢はきつく、施設で働いている人は本当にすごいと思いました。

私はすぐ良くなると思っていましたが、一ヶ月、二ヶ月が過ぎてもひいおばあちゃんの容態は悪くなるばかり。そして、ひいおばあちゃんは病院へ入院することになりました。私は部活や習い事が忙しく、なかなか会いに行くことができませんでした。ですが、お見舞いに行ったときは、「嬉しい、嬉しい」と喜んでくれて、とても嬉しかったです。

しばらく入院して骨折もだいぶ良くなってきました。ですが、家での生活は難しいので、施設へ移ることになりました。施設へ入ると一気にボケる、何もできなくなる、ということを知ったことがあったので、不安もありました。施設に入り始めの頃は、私達が会いに行くのを楽しみに待っていてくれて、相変わらずのおしゃべりで、同じことを何度も何度も話してくれました。お別れのときは、「もう行くのか、寂しいな、帰らんといて」と悲しそうに言うので私も寂しかったです。

気付けば骨折してから半年が過ぎていました。たったの六ヶ月。元気に自転車に乗っていた姿が、遠い昔のように感じました。最近では会いに行っても「来てくれたんかね」と、今までに比べ反応が少し寂しい気がします。三人姉妹の名前がいまいになったり、「今日何曜日?」「朝は何食べたの?」なんていう小さな会話を答えられないことが増えたり。いつかはこんなときが来るんだろうなと思っていたけれど、本当に来てしまいました。また昔のように一緒に遊んだり、テレビを観たり、楽しくお話しをしたり、そんな普通に当たり前のようなことができたなら良いのになと思います。本当は毎日のように会いに行って、私の元気パワー

をあげたいけれど、そんなにうまくは行きません。会いに行くたびにひいおばあちゃんが変化しているようで少し怖い反面、会えることはとても楽しみです。

たくさんお話しをして、いっぱいご飯を食べて、大笑いをして、元気なひいおばあちゃんと過ごしたかけがえない時間は、私の思い出から消えることのない一生の宝物です。私は今、とても幸せです。ひいおばあちゃんにも幸せであってほしいです。施設にいてもそこでしかできないこと、施設にいる友達とお話しをたくさんすることなど、毎日楽しんでほしいです。私ができること。それは、会いに行つて元気をあげることでだと思います。小さなことかもしれませんが、ひいおばあちゃんにとって大きな幸せになれば良いと思います。これから、もつともつとたくさんのお出をひいおばあちゃんで作っていききたいです。そしてまたいつかお家で一緒にテレビを観たり、おやつを食べたりできる日がくれればいいなと私はずっと願っています。ひいおばあちゃんのこれからの人生が、まだまだ幸せで楽しいものになりますように。



「ボランティア」とは

岡崎市立竜南中学校三年

荻野

紗也

私は、岡山の倉敷市真備町で行われた災害ボランティアに参加しました。きっかけは単純で、同じ倉敷にある祖母の家に遊びに行ったとき、母が行きたがったからです。元々私はあまりボランティアに興味がなく、普段は自ら進んで参加することなどありませんでした。今考えると、そこまで災害を身近に感じていなかったため、他人事のように考えていたのだと思います。しかし、今回のボランティアでそんな私の考えはがらりと変わりました。

まだボランティアに行く前のことです。災害ボランティアセンターのホームページを見ると、「防塵マスク、防塵メガネ、ゴム手袋必ず着用」などの服装指定や、「中学生以下の親の同伴なしの活動禁止」といった年齢制限までされています。水害ボランティアなのに大げさすぎるのではないかと思っていました。しかし、真備の街並みを見て、自分の考えの甘さを実感しました。周りを見渡してみれば一面砂で埋め尽くされていて、家がぼつぼつとある程度の場所もあります。一つ一つの家も、傾いていたり、折れた電柱が刺さりかかっていたりと、悲惨な形で残っています。一見がらくたの山に見えるものもたくさんありましたが、よく見てみるとがらくたではなく砂にまみれ壊れている家具や電化製品でした。防塵マスクをしないと砂ぼこりが煙たく、防塵メガネをしないと目がしみます。ホームページに載っていたことは全く大げさではないことが身にしみて分かりました。このとき私は初めて災害を身近に感じ、

怖いと思ったのです。もし私の住んでいる町にこのような災害が起きたらなんて、考えてみたくもない。そんなことを思いながら、担当の家のお手伝いをしに行きました。

被害に遭った方は、ボランティアが大勢来ることを嫌がるのではないかと思います。予想とは裏腹に、たいへん喜んで私たちを迎え入れてくださいました。

作業自体は単純です。流れてきた砂の山を土のう袋に詰めてトラックで運び出すといったものです。単純とはいっても、真夏日にする重労働なので大変です。私たち一般ボランティアの他にも、ボランティア団体の方々が来ていました。その方たちは要領が分かっているのに対して、私は全く分からず、周りに迷惑をかけてしまいます。それなのに、ボランティア団体の方々は声を掛けてくださったり、手助けをしてくださったりして、人の温かさに触れたように感じました。

私は、これを機にボランティアに対する考え方が変わったように思います。今までボランティアと聞くと、純粹に人のために動くというより、他にある利益のために個人で黙々と作業することだと感じていました。しかし今回の経験を通して、思っていたよりずっとよいものだということになりました。

また、ボランティアに参加する前は、自分が被害に遭ったときのことなんて考えたくはありませんでした。でも万が一のときのことを考えておけば、実際に災害が起きたときの被害を小さくできると思います。災害にもたくさん種類があります。その全てに対応できるように、家族で避難場所を決めておくなど、対策を取らないといけません。

自らボランティアに参加する人たちは、日常的に気遣いのできる人ばかりです。例えば普通のバスで全員が降りるとき、後ろの人が早く降りたり、前の人が降りるタイミングを見失うなど、誰も譲り合わない場面をよく見かけます。しかし、ボランティア専用のバスで真備町に着いたとき、前から左右二人ずつきれいに降り、それを乱す人は誰もいません

でした。このように、自らボランティアに参加できる人は、普段から人を気遣える人だと思えます。私も日常生活から他の誰かのために動ける人になりたいです。

そして、今度は自分の意志でボランティアに参加できる人、今回のボランティアで出会ったような人になりたいと思います。



迷子の大人

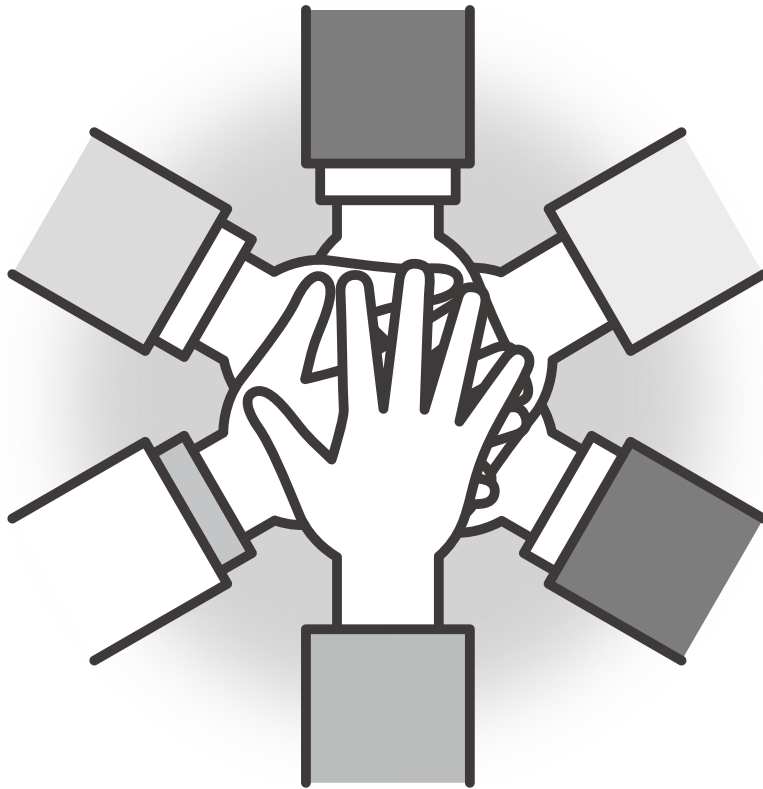
春日井市立味美中学校三年

滝澤 美咲

私のおばあちゃんは、五年前に認知症とわかりました。その時から介護生活がはじまりました。私のお母さんは、よくおばあちゃんの家へ行きます。私も一緒に行くことがあります。ある日の夕方、お母さんとお父さんが「おばあちゃんが家にいない。探してくる。」と言って大慌てで出て行きました。大人四人で探して探して、おばあちゃんがスーパールの椅子に座っている所を見つけました。私は留守番をしていましたが、その間事故にあつてないかとすごく心配しました。お母さんから「見つかったよ。」と連絡がくるまで、とても長い時間を感じました。おばあちゃんは、見つけた時に「何してるの？」と聞いたら「買い物にきてみんながいなくなったからここであつていた。」と答えたと教えてもらいました。私は見つかつて、事故にあつてなくて本当によかつたと安心しました。うれしかつたです。でも理由をきいてなぜだかわかりませんがとても悲しくなりました。私はスーパールの入口の椅子に座っているおばあちゃんが、みんな迷子だとは思わないのだろうなと思いました。私はこの事がきっかけで大人の迷子もいるのだと気がつきました。小さな子供なら「お母さんは？」と声をかける人もいて早い段階で、迷子だとわかるのかもしれない。大人の迷子は、どうやってわかるのだろうか疑問に思いました。調べてみると、挨拶をしながら話しかけ、会話の中でおかしいと感じたら「どこから来たのですか？どこに行くのですか？」などと聞くと良い事がわかりました。それから、お年寄りが一人ですつと

座っているのを見ると家族が捜していないかなと思うようになりました。「こんにちは」と声をかけたりは出来ませんが「こんにちは」と返ってきて終わりです。そのお年寄りが、おばあちゃんと同じ迷子で家に帰れない人かどうかわかつた事は一度もありません。なかなかその後の言葉は、言い出せませんがお母さんは「挨拶だけでも良い事だよ。挨拶かえしてくれるでしょ。」と言います。

五年間におばあちゃんは少しずつ色々な事が出来なくなり、おばあちゃんの家の中は段差がなくなったり手すりがついたりとおばあちゃんが生活しやすいように、介護しやすいようにと変わっていききました。大変な事もおこりますが、笑ってしまう事も沢山おこります。おばあちゃんを立たせる時、お母さんは手をそえて「立つよ」「いち、にのさん。」と声をかけるのですが、おばあちゃんは立たずに「しののの。」と元氣よく声だけ返す事がよくあります。私のお母さんと何回もこのやり取りをしています。おばあちゃんは氣が乗らないと全く協力しないのです。お母さんは一人では立たせられないのでおばあちゃんの協力が必要です。私は毎回おばあちゃんは元氣よく言うのでおもしろいと思いますが、私のお母さんはイライラしはじめます。おばあちゃんは手ごわいのです。私が笑つて「おばあちゃん立つ氣ないでしょ？」と言うと「醤油こと。」とかえつてきます。思わず笑つてしまいます。イライラしていたお母さんも笑つてしまいます。そんな時おばあちゃんは「美咲さんはおもしろいわー。」と笑っています。みんなは、おばあちゃんは私があると元氣になると言います。私がおばあちゃんに元氣をあげられるのなら沢山あげたいです。そして楽しく生きてほしいです。私は、おばあちゃんのおかげで子供だけでなく大人の迷子もいるのだと気がつきました。また道路は段差が多すぎる事もわかりました。車いすが通る事を考えて道路は作られています。車いすでは少しの段差をこえる事が大変なのです。私に氣にもとめないぐらいの段差がおばあちゃんの外出をあきらめさせてしまうのです。外出先で人に優しくされて感謝したり、嫌な態度をとら



れて腹が立ったり本当に沢山の事を知る事ができた五年間です。私は困っている人がいたらいつでも迷う事なく「何かお手伝いできる事はありますか」と話しかけられる大人になりたいです。

ヘアドネーションを経験して

津島市立暁中学校三年

重村 ゆうゆ

「ヘアドネーション」という言葉を知っていますか。「ヘアドネーション」とは、癌や白血病、先天性の無毛症、不慮の事故などにより髪の毛を失った子供たちに、寄付された髪の毛を使用して、完全オーダーメイドの人毛の医療用ウィッグを無償提供する活動です。髪の毛を失った子供たちの笑顔を取り戻すため、二年前から活動が始まったそうです。

私は、この活動をテレビのニュースで知り、ちょうど髪の毛を切ろうか伸ばそうか迷っていたのですが、自分にも出来るボランティアがあることを知り、この活動に協力することにしました。

まずは、ウィッグを作るのに必要な髪の毛の長さを調べました。調べたところ、髪の毛の長さは三十一センチ必要なが分かりました。私の髪の毛の長さはすでに必要な長さに達していましたが、女の子によってはロングヘアが好きな子もいるかなと思い、もう少し伸ばすことにしました。少しでも長い髪の毛のウィッグが出来て、私の髪の毛で作ったウィッグを被った子が喜んでくれたらいいなと思いました。

次に、どこに行けばウィッグが作れるかを調べました。すると、この美容院でもいいという訳ではなく、ドネーションサロンというヘアドネーションに賛同する美容院でなければいけないことが分かりました。活動が始まってまだ間もないせいか、近くの美容院ではまだ行っていないため、大須にある美容院で髪の毛を切ってもらうことにしました。髪の毛を伸ばすと決めた日から、少しでも状態の良い髪の毛を提供で

きるように髪の毛が傷むようなことは避け、トリートメントなどのケアもしっかりするようにしました。自分の髪だけど、すでに私の髪ではない感じで、誰かのために髪の毛を育てているような不思議な感覚でした。一日、一週間、一ヶ月と日が経つ毎に、髪の毛の長さとは比例してウィッグを被った子の笑顔が頭に浮かんできました。

いよいよ髪の毛をバツサリ切るという日、私の心はやり遂げた達成感と、今日まで育てた大切な髪とさよならする寂しさとが入り混じり、とても複雑な気持ちでした。待ちに待った日だというのに、もう少しこのままでもいいという思いで、ハサミが髪の毛に入るまで、私の心はユラユラゆりかごのようにゆれていたと思います。だけど、美容師さんの手に、一束の黒い房が握られた時、私の決心はゆるぎないものになりました。トレーの上に並べられた黒い束は、いつもの散髪と違ってひとときを輝いて見えました。鏡に映った肩までの髪を見た時には、自分で自分を誇らしく思いました。

人のためになることって、こんなにも気持ちがいいことなんだということ、この経験から知ることができました。普段、うっとうしく感じることもある髪の毛が、誰かの役に立てることを教えてくれたテレビの番組にも感謝したいです。ですが、まだまだ「ヘアドネーション」の認知度は低く、世間にも普及しているとは決して言えません。髪を切るという行為は、痛くもないし時間を取られることもそんなにありません。誰にでも出来るボランティアなのです。もっともっと多くの人にこの活動を知ってもらい、ドネーションサロンが増え、気軽に活動に参加できるようにするには、「ヘアドネーション」のことを多くの人に知ってもらう必要があります。美容院だったり、あるいはテレビの番組などでの活動を取り上げていただき、宣伝していくことが大事だと、私は思います。

一人の子のウィッグを作るのには、二十人から三十人分の髪の毛が必要だそうです。ウィッグを待ち望んでいる子供たちは大勢います。一人

でも多くの人達に参加してもらえよう、まずは身近な人達に、この活動と話してみようと思います。笑顔の輪が、大きく広がっていけばいいなと思っています。



「当たり前ってなに？」

豊田市立前林中学校三年

久保田 想乃

私のいとこは障がいをもっています。誰かに支えられていないと歩けず、うまく言葉を口に出せません。最近、そんないとこを通じて今まで感じなかったことに気付く出来事が三つありました。

一つ目は、自分が体験したことからでした。中学三年生になった四月の下旬、私は足の指の手術をして車いす、松葉杖生活が始まりました。このとき、今まで手伝う側だったのにされる側になり、つらい体験をするとは思いませんでした。いとこを手伝っていたときは、まわりからの視線はそれほど気になつたりしませんでした。自分が車いすに乗って買いたものに出かけたとき、はじめは恥ずかしい気持ちに先に立ってわかりませんでした。だんだん慣れてくるにつれてまわりからの視線に気がきました。私の手術した部位はあまり見たことがない人が多いので仕方ないと思っていましたが、「かわいそう」といった声が聞こえたときに私ははっとしました。いとこはいつもこんな目でまわりから見られていたのだと。私は二、三か月でこの生活は終わるけれど、いとこはこれがつつと続きます。車いすは楽ですが居心地のよい場所ではないことに気がつくきました。

二つ目は、いとこと一緒に買い物に行ったときでした。私は自分の体験を踏まえて見る目を変えました。いつもどおりご飯を食べていると、通りすがった子がいとこを見て「なんかかわいそう」と言って立ち去りました。普通にご飯を食べていただけなのに、何がかわいそうなの？自

分で箸を使うことができないから？上手に食べられないからかわいそうなの？いとこに対して「かわいそう」って一体なんだろう。「かわいそう」にはいろいろな意味があります。他人に対して安易に「かわいそう」を使用することは、他人のことを否定して見下しているように受けとることがあります。他人の痛みを自分に置き換えるというやり方でわかることは、他人の本当の痛みではなく「自分があの人だったらこのくらい辛いだろう」という自分の感覚。自分には当たり前なことができていないから「かわいそう」という価値観を押しつけられている。という風に私はとらえています。

実際、人の気持ちはわかるはずがありません。だから何とも言えませんが、一つの言葉でまわりの人はいい気分ではなくなります。それを「かわいそう」という言葉から気付きました。

三つ目は、インターネットの記事を見たときでした。「障がい者って自分の存在が健常者に負担されてるってこと、自分たちが社会に厄介になつて、お世話になつていいる存在だってことをもっと自覚したらどうなんですか？」と書いてあるのをみつけました。たしかにみんなと同じようにやろうと思ってもできないので、まわりのフォローが必要になつて、健常者にたくさん負担をかけている方もいます。それは健常者からすると無理もない意見だと思います。ただ「厄介」という言い方はしてほしくありません。なりたくて障がい者になつたわけではないです。誰のせいでもないのです。健常者の意見を否定するわけではありませんが、障がい者の方々は、健常者以上に我慢をし、強いです。生活面では、生活リズム・排便や水分補給の時間。身体面では痛みや動きづらさ。私たちは到底出来ない我慢です。障がい者の全てを受け入れてほしいというわけではありません。人によって障がいも人柄も違いますから。しかし私たちも障がいをもつことになる可能性もあるのです。もし交通事故にあい、今までどおりに生きていくとしたら、元の生活をとり戻せますか？「障がい者を負担」だと考えている健常者がたくさんいる世の中で、

どのように生きられますか？今障がいをもっている人は本当に凄いです。障がいを乗り越えようとしてる人は強いことに気がきました。

ある日、障がいをもった知らない人がいきなり大きい声をだし、パニック状態になっているのを見ました。私は慣れていたので気にしていませんでしたが、まわりの人はその人のことをじろじろ見たり、小さい声で話したりしているのを見たとき、私はせつなくなりました。平気で軽々しく「障がい者だ」「変だね」「かわいそう」と発言しています。もっと言葉を考えてほしいです。自分にとって当たり前なことをおしつけず、理解してくれる当たり前に流されない。そんな人が増えてほしいです。



ねえねえ、あの人を見て

安城市立東山中学校三年

山田

理奈

街を歩いていると、様々な人が忙しそうに行き交っている。そんな中で誰しもがこんな言葉を聞いた事があるのではないだろうか。障害者を差別する言葉である。私は、この言葉を聞くと胸がキュッと痛くなる。なぜなら、私の曾祖母も障害者であったからである。私も、曾祖母と買物に行った時、一部の人が偏見や好奇の目で見ていることに気づいたことがある。とても悲しいことだと思った。

私の曾祖母は、早くに曾祖父が亡くなったので、三人の子供を育てるため工場で働いていた。その時に機械に手を巻きこまれて、右腕を失くしたのである。利き手である右腕を失くし、とても落ち込んだそうだった。そして、落ち込んでいるのに追い打ちをかけるように、同情や偏見、好奇の目で見られたり、急に目をそらすなど、態度を変えたりする人もいたそうだった。聞いていて、胸が張りさけそうになった。しかし、曾祖母はどんな逆境にも負けず、左手一本で、仕事に家事に育児に、どんな事もやりこなしたのだ。今では、両手がある私が苦手な編み物でも、片手で上手に編みあげて、セーターなどを作ってくれる。何をやるにも、足や口、いろいろな所をうまく使い、健常者と変わらぬ生活を送っているのだ。でも、そうなるには私達には想像できないぐらいの努力があったのだらうと思う。

曾祖母を支えたのは、三人の子供と大切な友達だったという。三人の子供は、右手を失くしても、生きる希望を与えてくれ、休みの日は積極

的に買い物や旅行に連れて行ってくれたそう。そして、そんな経験をきっかけにいろいろな仲間ができたそう。そんな曾祖母の口ぐせは、「死なないで良かった」だった。この言葉の裏には、どれだけの辛く苦しい日々があったのだろうかと思う。

曾祖母にとって一番辛いのは、障害そのものもちろんだが、「人の自分を見る目」なのだそうです。私もまだ物心つかない幼い時は、よく曾祖母の事を好奇心な目で見ていました。そして、曾祖母は、人の見る目を気にして、義手を作ってもらい、出掛ける時は必ず装着していました。普段、家に居る時は義手ははずしていたので、いつもその義手を私は怖がったり、ひどい事を言ったりしたものです。今思うと、とても反省の気持ちでいっぱいになります。身近な孫から、からかわれる事がどんなにつらかったことでしょう。でも今は、障害に負けずに前を向いてあきらめず、手が一本ない事を理由にせず、何事にもチャレンジしてきた曾祖母の生き方そのものが、人間としてすてきだと思います。

高齢になってからは、足腰が悪くなり、車イスで移動する事が多くなりました。以前のように、積極的に旅行に飛びまわったりする事は出来なくなりましたが、持ち前のパワーで車イスでいろいろな出掛けています。

車イスというとバリアフリーという言葉に関連づけてよく耳にします。この言葉は、生活をしていく上での障害をなくすことだと思いますが、私は「心のバリアフリー」、つまり障害などのある人との「心の壁をなくすこと」が一番大切なのではないかと思っています。お年寄りも障害のある人も心は私たちと変わりません。私は偏見の目を持たずに自然に全ての人と向き合う事が出来ればと曾祖母と一緒に過ごした経験から思います。それが心のバリアフリーだと思っています。

私は福祉とは、ボランティアのようなものだと思います。しかし今回福祉について調べてみたら、全ての人が幸せに生活できる事を願うそれを支援することだと知りました。とても素敵な意味が込められて

いるのだと思い、そんな気持ちで全ての人が生活できれば良いと思います。

福祉というのは人と思う心が人から人へつながって成り立っているのではないかと思います。全ての人たちが障害者や健常者など差別や偏見を乗り越えて一つになれば、それが最高の福祉だと思います。



その言葉

小牧市立味噌中学校三年

奥

百美

どんな言葉を言われたら嬉しくなりますか。その言葉は何をしたら聞くことができますか。私にとってその言葉は「ありがとう」です。相手のことを思いやり、考え、そのことを行動に移せば「ありがとう」という言葉を聞くことができます。

福祉の施設には老人ホームや乳児院、授産所などがあります。私は中学校の三年間で、これらの施設で体験をさせていただきました。福祉施設での体験は施設によって仕事の内容も接する相手も全く違います。年齢や障害の重さなどが大きく違うことで、補助の仕方は当然違います。

老人ホームには、足腰が弱くて一人では歩けない人や思うように話せない人、認知症の方など、様々な方がいらっしゃいます。その中でどのようにすると「ありがとう」を聞くことができるのか。その言葉を聞くために接するわけではないけれど、自分の行動をお年寄りの方に、心地よく感じてもらうためにどうしたらいいのかと考えました。自分がよくかれましたが、相手にはお節介りだったりもします。自分でやれるチャンスを得ることにもなるからです。その点で、老人ホームでの体験はとても難しいと思いました。

老人ホームと乳児院で、大きく違うのは年齢です。幼い子はまだ体が発達していない部分が多く、できないことがお年寄りの方よりも多いです。また、言葉もきちんとしゃべれないため、自分の思いを正しく伝えることができません。ですから、私たちがそれを感じ取り、理解するこ

とが大切になります。その上、できないこと、やったことがないことはやり方を教えてあげることも必要です。何でもやってしまつて甘やかすのではなく、その子どものことを考えて、自分でやれるように導いてあげなければなりません。乳児院は幼い子たちの施設なので、楽しそうと思っていました。自分自身が考えながら接していかなければいけないので、楽しいこと以上に大変なことも多いです。

私は一年生で授産所に行き、障害のある方が笑顔で一生懸命に働く姿を見て、自分も頑張らないといけないという気持ちになりましたが、思うように動くことはできませんでした。それなのに、皆さんから「ありがとう」という言葉を掛けられ、「来年も参加したいなあ」という気持ちになりました。

二年生では乳児院で、今年は老人ホームで福祉体験をしました。そこで、乳児院と老人ホームの違いを感じることができました。

老人ホームでは、五十歳以上の方々と交流させていただきました。一日目は、日帰りでデイサービスを利用する方が多かったのですが、その方たちがお風呂に入った後に髪を乾かす体験が中心でした。緊張してなかなか話しかけることができないでいると、「塗り絵やるでしょ。」とか、「どこの中学校？」と、私にいろいろと質問してください、とても気持ちほぐれました。髪を乾かすことは毎日、自分でやっていることです。が、「どのようにしたら、効率よくできるのか。」「ドライヤーを近づけて、熱風が顔に当たらないようにするためにどうするか。」など、たくさんのお年寄りの方の髪を一生懸命に乾かしていたら、「ありがとう」という言葉が聞こえてきました。私の大好きな言葉なので嬉しくなり、もっと頑張ろうという気持ちになりました。

二日目は、その施設で生活をしていらっしゃる方々の介護の体験をさせていただきました。私はデイサービスのような形での介護しか体験しなかっただったので、施設で生活をされている方の介護の仕方は全くわかりませんでした。家で暮らせないほどの重度の介護が必要なのかな



と想像していました。でも、想像とは裏腹に、何でも一人でできる方や周りの方と会話を楽しんでもみえる方もいらっしゃいました。また、その一方で、耳の遠い方の中には、どんなに大きな声でしゃべったり耳の近くで話したりしても、スムーズに聞くことができない方もみえました。このことは分かっていたつもりでも衝撃を受けました。施設での生活の中では、リハビリも兼ねて洗濯物を自分たちで畳んだり、食事の準備をしたりしている姿を見ることがありました。自力でやれることが限られていると思うていた私にとって、この光景はとても新鮮で、生きることに向き合っているように思えました。

この三年間の経験から、相手のことを考えて行った自分の行動が、直接、相手に届くことは多くの発見があり、大きな喜びにつながると実感しました。そして、施設の職員の方々の動きや気配りには、やはり、いつも相手を思いやる温かさを感じました。

「ありがとう」という言葉、その言葉は、そんな人にこそ聞こえる言葉です。だからこそ、私もその一人になりたいと思います。

ボランティアに参加して

武豊町立武豊中学校三年

石井

さら

わたしが初めてボランティアに参加したのは、中学一年生の時の赤い羽根募金です。ボランティアの意味もあまり理解せず、ただ人と話すことが好きで、色々なことを体験できそうなので、軽い気持ちで参加してみようと思いました。初めは、緊張していて、大きな声で募金呼びかけることができなかったのですが、知り合いの人もたくさん来て下さり、だんだん緊張もほぐれ大きな声が出るようになりました。募金箱がだんだん重くなることが嬉しくて、たまらなびに箱を振っていました。最後には、他校の生徒とも仲良くなり、みんなで一緒に喜びました。それから、色々なボランティアに参加しましたが、どれも本当に楽しいものばかりでした。初めは、人の役に立ちたい、手助けをしたいという思いはほとんどなく、他校の生徒や地域の人々、かわいい子供達との出会い、そこから生まれる会話や、みんなでワイワイしながら食べる雰囲気純粹に楽しんでいただけでした。誰かのためにというよりは、自分の思い出作りという感覚でした。

わたしの中で少しずつ意識が変わったのは、障害者の方たちの運動会に参加した時でした。わたしは小学生の男の子とペアになり、一緒に色々な競技をして楽しんでいましたが、しっぽ取りという競技の時、男の子は自分のしっぽを取られてしまい、また人のしっぽをなかなか取ることができず、怒って泣き出してしまいました。わたしは、そばにいてだけでどうすれば良いかわかりませんでした。そして、なかなか泣きやまず

床に寝ころんでいたところに、男の子のお母さんが来ました。お母さんが何を言っても泣き止まず起きようとしないので、お母さんも泣いてしまいました。そばにいた施設の人が、男の子の好きな車を見に行こうと外に連れて行くと、お母さんも後を追って行きましたが、すぐに戻って来てわたしに、

「ごめんなさいね。本当にごめんなさい。今日は楽しかったです。ありがとう。」

と目を赤くして帰っていかれました。わたしはこの時、はいとしか言えませんでした。わたしも一緒に遊べて楽しかったのに、男の子のためにしっぽを取ってあげたかったのに、泣いた男の子にたくさん言葉をかけて元気になってもらいたかったのに、お母さんにも伝えたいことがあったのに、何も言えなかったし、何もできなかったことがたくさんあり、初めて後悔ばかりのボランティアを経験しました。今でも男の子のお母さんが泣いてしまったことが心の中にあって、たった一日しかボランティアに参加していないわたしが、お母さんの大変さや気持ちを全部理解することは難しいけれど、わたしの母がわたしのために涙を流すことを思うと、とても悲しい気持ちになりました。でも、それまでは本当にとっても楽しい時間を過ごすことができたので、お母さんが言って下さった言葉は嬉しく思いました。またもし、どこかで会えたら必ず伝えたいと思います。

わたしはこのボランティアで、今までのような楽しさだけではなく、悔しさやさみしさ、自分に対する憤りなど、いくつもの感情を経験しました。そして、幼児からお年寄りまでの障害者の方たち、職員の方と一緒に参加したボランティアの方たちと接して話すことで、自分の世界が大きく広がりました。世の中にはたくさんの方がいて、それぞれ個性があり、それはとても素晴らしいことだと思いました。また、ボランティアの一人の方が上手に障害者の方を笑顔でサポートされていて、自然に出る言葉や表情がとても優しく、わたしもこうなりたいと思いました。

ボランティアには、経験や知識、体力などとても大切だと思いますが、一番大切なのは、その人がもつ心ではないでしょうか。助けてあげたい、力になりたいと思うよりもまず、一緒に寄り添う。同じ気持ちになつて考える。一人ではできないことも、みんながそういう心を持てば、そこから生まれる信頼関係が、意味のある豊かなボランティア活動につながるのだと思います。今はまだ、わたしは自分のことで精一杯で、ボランティアに参加しても自分が得ることばかりですが、いつか誰かの役に立てるように、強く優しい心を育てることを頑張りたいです。そして、機会があれば、またボランティアにも積極的に参加したいと思っています。



私を変えてくれた部活

中部大学春日丘高等学校二年

大槻 あかり

私は普段、インターアクトクラブという部活で、福祉活動やボランティア活動を行っています。しかし、この部活に入るまでは福祉やボランティアなどとはまるで縁のない生活を送っていました。そこからどのように私がインターアクトクラブへ入ったのかをまずは説明したいと思います。

きっかけは友人からの誘いでした。最初に体験入学へ行ったときに、先輩からどんな活動をしているかという説明をいただきましたが「実際に行ってみた方がわかる!」ときいたので活動に参加することにしました。

初めて行った所は高齢者施設でした。内容は高齢者の方とお話をする活動でした。最初は先輩に頼りきりで不安でしたが、勇気を出して一人のおばあさんに話しかけてみたら会話がとても楽しかったのでこの部活に入りました。今でも鮮明に覚えています。

それから障害者施設や地域のお祭りの運営の活動にも参加しました。特に地域のお祭りでは、ダンスパフォーマンスや屋台のお手伝いをしました。また、インターアクトクラブで屋台を出店して、商品を販売しました。その屋台では、カンボジアの方がつくったバッグなどのフェアトレード商品や、東北支援のはちみつ、障害者の方がつくったクッキーな

どを支援として販売しました。ダンスパフォーマンスではたくさんのお客様の笑顔を見ることができて、お祭りの運営の方々にも喜んでいただけてとても嬉しかったです。

また、施設でのお手伝いや運営だけでなく、IACという直接の支援にも挑戦しています。IACとは、「いっぱいありがとうカンパニー」の略で、まだまだ元気な高齢者の方に商品を作っていただき、私たちが「ありがとう」と伝えようという取り組みです。まだまだ開発途中ですが、部員で協力して頑張っています。

このように、二年生になるまでいろいろな活動をしたことで、最初は何も知らなかったのですが、少しずつ知識が積み増しました。その中で、福祉やボランティアの活動にもいろいろな形があるんだと思いました。直接施設へ行って介護をするのももちろん、商品を売って間接的に支援することもボランティアなんだと思いました。

そして、二年生になるとボランティアで訪問する専属の施設を決めて活動するのですが、私は一年生のころの体験から障害者施設に行くことを決めました。その理由は、私の姉が障害を持っているということが一番大きかったです。私の姉はアスペルガーとてんかんを持っていて、その施設にも似たような子がたくさんいたので、お話をすることで理解したいと思いました。

その障害者施設では、普段は散歩の補助や一緒に遊ぶというボランティアをしているのですが、私たちが企画を持っていった利用者さんに楽しんでもらうということも行っています。

その企画というのは、手遊びやゲーム、工作を通じて季節を感じてもらい、利用者さんに楽しんでもらうというものです。例えば、二月に行う予定であれば、まずは「節分」などのテーマを決め、鬼に関する手遊びや豆まきのゲームを考えて、利用者さんと一緒に楽しむという内容です。

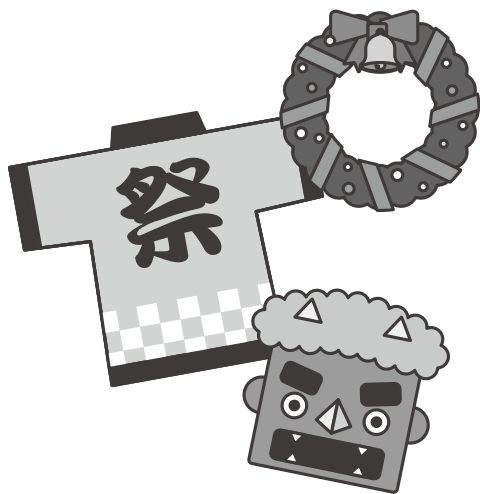
利用者さんは障害の重い子どもから高校生ぐらいの人が多くいて、企

画を考えるとときにはとても大変ですが、一緒に楽しんでいるときにたくさん笑顔を見ることができるので、今ではとてもやりがいがあると思います。

まだまだボランティアを始めて一年半しか経っていませんが、インターアクトクラブではいろんな種類の活動ができるので、実際に社会で働くことになる時にこの経験は生かせると思います。実際にこの部活に入ったことによって、「将来は福祉の道へ進みたい」という先輩や同級生もいるので、私もこれから将来に向けて生かせるといいと思います。

また、活動をしていると、人と関わる人が多いので、内気だった性格がいつのまにか積極的になっていくという変化もありました。この先活動していく中で、今まで築いてきた人間関係や性格を生かして、「人から求められるようなボランティア」を常に意識して頑張ろうと思いました。

ささいなきっかけで入った部活でしたが、人生にこんなにも影響するんだなと思いました。この部活に入って本当によかったです。まだ引退までは時間があるので、できる限りこのインターアクトクラブで福祉やボランティアを頑張っていきたいと思っています。



小さな行動その二つで

愛知県立新城高等学校二年

杉浦

末侑

私は、五人兄弟の三番目です。私が一番と言っているほど兄弟の中で仲が良いのは五歳離れた一番下の弟です。しかし、言い合いをする時も沢山あります。言い合いの原因は、必ずと言っていいほど彼の発言に対して私がイラッとするからです。彼はいつも何か注意をしても言うことを聞きません。私が「机揺らさんでよ。」と言うと彼は「なんで？」と言います。ある程度の人は、机が壊れてしまうから、周りの人に迷惑だから、など理由は想像がつき、机を揺らすという行為をやめるでしょう。それでも彼は注意をされたからと言ってやめません。何度同じ事を言っても、何を注意されても「なんで？」と言いい、それに対して「なんで分からんの？やめてって言つとるじゃん。」と強くあたってしまい、それから言い合いになります。「自販機に行こう」「なんで？」目当ての物に指を差して「それとって」「どれ？」「夜だでもう少し静かにして」「どうして？」「このように彼から返ってくる返事は「なぜ？」「どうして？」「どれ？」「だから？」など疑問形の言葉ばかりです。他の人からすればそれに対して強くあたるのはおかしい、と言う人もいるかもしれません。ですが、毎度毎度疑問形で返されるとあきれれるものです。本当は分かっているのにとぼけているのではないか、そう疑いたくもなります。家族も、何故他の人には分かることが彼には分からないのだろう。そう疑う事もありましたが、それ以上深く考えることはありませんでした。

そんな彼が、小学校でのある出来事をきっかけにメンタルクリニック

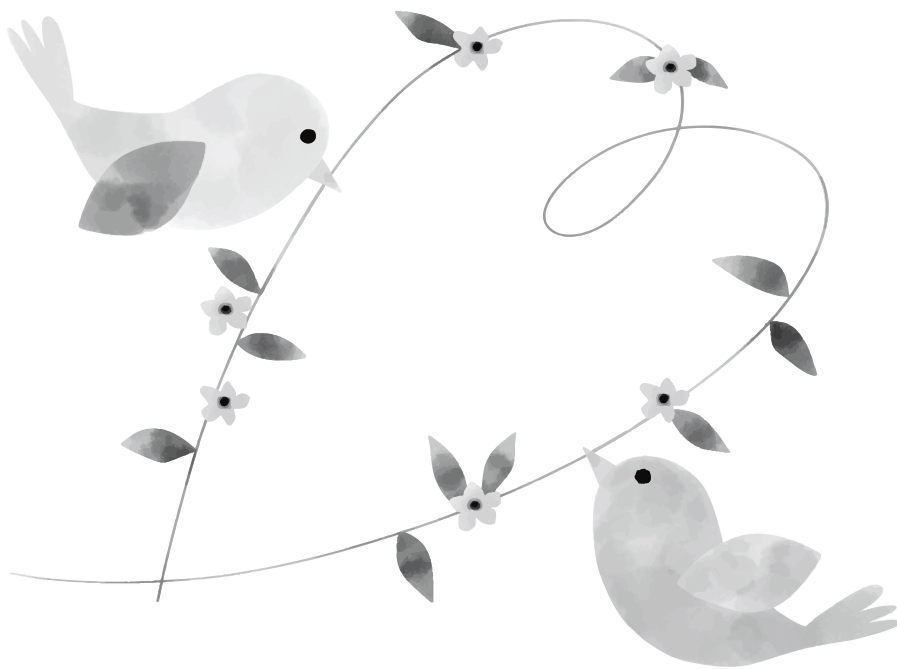
に行き診断を受けることになりました。その結果、彼は広汎性発達障害だということが分かりました。その障害の特徴として、コミュニケーション能力に発達の遅れがあらわれます。そこで分かったのが彼はとぼけているのではなく、本当に物事が理解できないのです。人が指差す物を「それ」「あれ」などの「こそあど言葉」で伝えられると理解できません。また、長文で用件を伝えられると頭の中を整理するのに時間がかかってしまうのです。それなのに今まで障害だということが分かっていなかったせいで、沢山の人の怒られて、辛い思いをしてきたのです。

私は、この事から、ある一定の物事をみんなが理解できる、そう決め付けてはいけないなと思いました。これは障害をもつ弟がいたからこそ深く実感することができました。自分の思っている事は、自分にしか分からない、他人が思っている事は、その人にしか分からない。言葉にしくなくても伝わる、そんな事で伝わるのはほんのわずかな事しかないのかもしれない。『ジュースを買うから、自販機に行こう』『机が壊れるし、傾くから、机を揺らさないで』『おつかいを頼まれたから、スーパーと一緒にいこう』『雨が降るから、傘を持って行きなさい』。このように、「こういう理由があるから、こうしなさい」ということを簡潔に言わなければ、彼には伝わらないのです。「言わなくても伝わるだろう」と思っただけで、彼には伝わらない。分かります。その一つで彼はうんと楽に物事を理解できるようになるのです。

私は、彼のおかげで相手の気持ちを考えて行動することの大切さを学ぶことができました。物事を理解できずに彼は困っていたかもしれない、それでも面倒くさいからというちっぽけな理由で省かれていた言葉を伝えるだけで、彼の手助けになる。自分の小さな行動が、人を思いやる行動に繋がるんだ、という事を彼は気付かせてくれました。

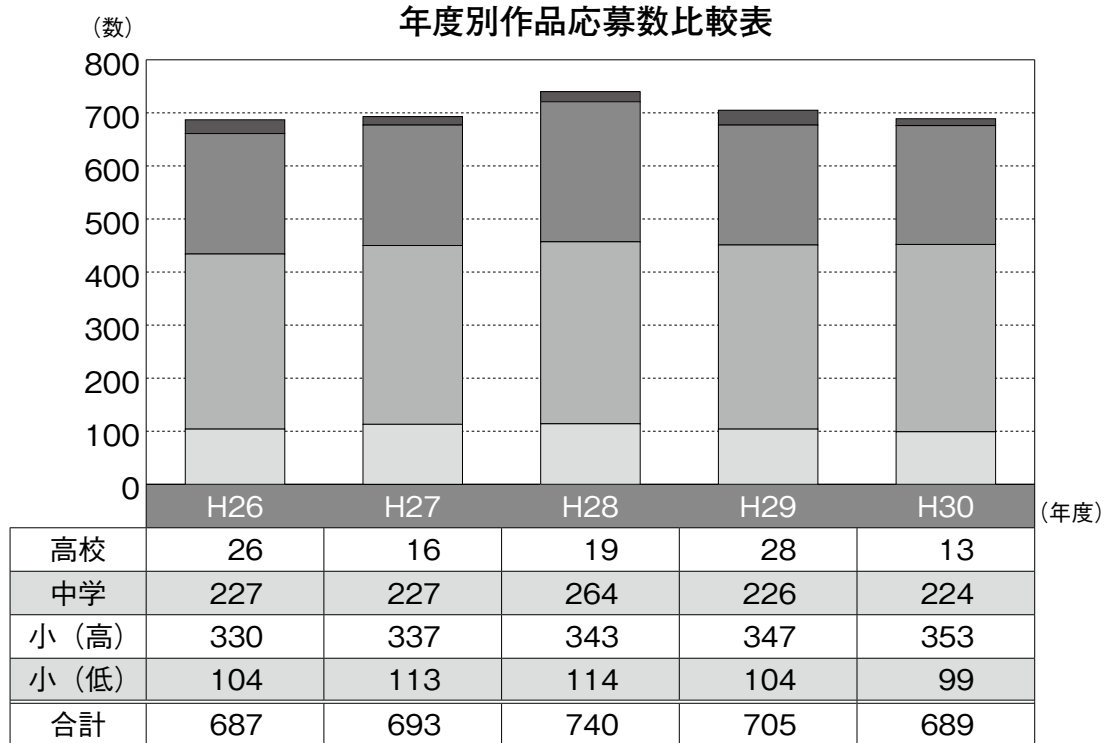
今までの私は人を助けるために行動することは、少し勇気があることだと思っていました。でも、それは間違っていて、自分が起こしたほんの些細な行動や言動ひとつが、誰かのためになる、ということが分かり

ました。人を思う心を意識しなくても、自分の行動や言動が少し変わるだけで、自分ではない誰かを助ける事ができるのです。そんな事を気付かせてくれた彼には感謝しかありません。彼が気付かせてくれたこの事を胸に、私は、これからの生活を送っていこうと思います。



■ 福祉体験作文コンクール ■

《応募状況》 応募総数 689編



《審査状況》

福祉体験作文コンクール選考委員会を次の方々に依頼し、募集要項に基づき厳正なる審査をし、部門毎に優秀作品を決定しました。

福祉体験作文コンクール選考委員

(敬称略)

船尾 日出志	愛知教育大学名誉教授
杉浦 和明	愛知県教育委員会義務教育課指導主事
大澤 瑞夫	愛知県教育委員会生涯学習課主査
三好 宏和	AJU自立の家わだちコンピューターハウス
江口 康彦	愛知県身体障害者福祉団体連合会常務理事兼事務局長
大橋 昌司	東海市社会福祉協議会常務理事兼事務局長
西尾 浩志	愛知県社会福祉協議会地域福祉部長

平成三十年度 福祉体験作文コンクール募集要項

一、趣旨

児童・生徒が、学校内外で体験する福祉活動やボランティア活動は自己の幅を広げるための豊かな経験となるものであり、ともに生きる福祉の心を育ててくれるものです。

こうした経験を通して感じたことや考えたことを、素直な気持ちで作文に表わしたものが心に残り、日常生活の中で広がっていくことを期待して、福祉体験作文を募集します。

二、主催

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

三、応募対象

趣旨に賛同する愛知県内（名古屋市を除く）の小・中・高等学校及び特別支援学校の児童・生徒

四、応募作品の内容

学校での福祉実践教室やボランティア活動等の体験、地域や家庭、身近なところでの体験について、自分の考えや感じたことを表現したものとします。

五、部門

- (一) 小学校低学年の部（一～三年生）
- (二) 小学校高学年の部（四～六年生）
- (三) 中学校の部
- (四) 高等学校の部

六、作品規定

(一) 四〇〇字詰め原稿用紙（タテ書）を使用し、各部門の枚数制限は次のとおりとします。

- ア 小学校低学年（一～三年生）——一～三枚以内（四〇〇字以上二二〇〇字以内）
- イ 小学校高学年（四～六年生）——二～四枚以内（八〇〇字以上一六〇〇字以内）
- ウ 中学校・高等学校——四～五枚以内（一六〇〇字以上二二〇〇字以内）

※題名は一行目、学校学年氏名は二行目、本文は三行目から一マス空けて書いてください。

(二) 応募作品は、原則として自筆に限ります。ただし、障害等の場合はその限りではありません。その旨を明記してください。

(三) 応募作品には、所定の応募票を添付してください。

七、応募規定

(一) 小学校及び中学校の応募数は各部門二編以内、高等学校は三編以内とします。

(参考)

- 小学校低学年 一校につき 二編以内（一～三年生）
- 小学校高学年 一校につき 二編以内（四～六年生）
- 中学校 一校につき 二編以内
- 高等学校 一校につき 三編以内

(二) 応募作品は、未発表のものに限ります。

(三) 応募作品は、理由のいかんにかかわらず返却しません。

八、応募方法

下記の応募票を添付し、学校のある市町村の社会福祉協議会に平成三十年九月二十一日（金）までに応募してください。

九、選考

選考委員会を設けて、部門ごとに入選作品を合計二十五編程度選考し、平成三十一年二月（予定）に発表します。

十、表彰等

入選者には賞状、副賞及び優秀作品集を贈呈します。

十一、作品集の作成等

入選作品を掲載した優秀作品集を作成するとともに、入選作品は愛知県社会福祉協議会ボランティアセンターのホームページに掲載します。



平成30年度
第36回 福祉体験作文コンクール

優 秀 作 品 集

発行 愛知県社会福祉協議会

〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目50番地
愛知県社会福祉会館内

TEL(052)212-5502 FAX(052)212-5503



2019年2月